HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	高校中退の軌跡と構造 ： 北海道における64ケースの分析
Author(s)	横井, 敏郎; 伊藤, 健治; 横関, 理恵
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 131, 111-144
Issue Date	2018-06-28
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.131.111
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71022
Type	departmental bulletin paper
File Information	070-1882-1669-131.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

高校中退の軌跡と構造

－北海道における64ケースの分析－

横　井　敏　郎*・伊　藤　健　治**・横　関　理　恵***

【目次】
はじめに
Ⅰ　先行研究・調査と本研究の視点と方法
Ⅱ　調査の対象と方法
Ⅲ　ケース分析――進学・就労面から
Ⅳ　グルーピングによる分析――家庭の条件と中退後の状況
おわりに
【キーワード】高校中退経験者，若者の移行過程，早期離学，自己解釈，社会的排除

はじめに

本稿は，現代日本における若者の移行過程を探る作業の１つとして行った，高校中退経験者に関する質的調査の報告である。

ポストフォーディズムのもと，人びとのライフコースに変容が生じ，とりわけ若者の移行過程の変化と困難は顕著になっている。非正規雇用の拡大や失業率・無業者の増大など，就労の難しさが若者のキャリア形成に大きな影響を与えており，高学歴化の趨勢もあいまって，青年期から成人期への移行の長期化が進むなど，かつての学校から雇用への間断無き就職システムに支えられていた戦後型青年期は崩壊したとされる（乾 2002)。社会格差や貧困の拡大を背景にして不登校・高校中退などの早期離学やひきこもりなども社会問題化しており，これらも若者の移行過程の変容に関わっている。

こうした状況を受け，2000年代以降，若者の移行過程およびその支援に関する研究が進められ，有意義な知見がもたらされているが（代表的なものとして宮本みち子，乾彰夫，本田由紀らの研究があげられる。)，欧米の若者研究に比してその蓄積はいまだ少なく，さまざまな観点から若者とその移行過程の研究を進め，知見の豊富化を図ることが求められている。それは学校から仕事への移行にとどまらず，意識も含めて若者の生活全般を対象とすることが必要であるが，近年の若者の移行が社会格差の拡大によって大きな影響を受けていることを踏まえるなら，不利な状況にある層についての認識を深めることが重要になっている。社会が高学歴化し，以前に増して教育歴が重視される時代に入り，教育の中断，早期離学は不利を招きやすい。また貧困層研究において貧困の世代的再生産が指摘されており，その点からも早期離学は検討が

* 北海道大学大学院教育学研究院・教授
** 東海学園大学教育学部・講師，北海道大学大学院教育学院博士後期課程
*** 北海道大学大学院教育学院博士後期課程
DOI：10.14943/b.edu.131.111

求められている。そこで本稿では，若者の移行過程研究の一環として高校中退を取りあげる。現在の日本においては高校卒業資格が無ければ高等教育への進学が困難となり，また就職面でも不利となりがちであるため，高卒資格を得られるかどうかは人々の社会生活と人生においてきわめて重要な意味をもつようになっている。高校中退を経験した若者がどのような経過を経てそれに至り，またその後，どのような進路や生活をたどっているのかを事例分析を通じて検討したい。若者の移行過程研究は量的な把握とともに，若者たちがどのように生き，学び，働いているのかをその経験に即して考察することが不可欠である。以下では，まず先行研究と本稿の課題を述べ，次いで高校中退経験者調査の分析結果を報告する。

Ⅰ　先行研究・調査と本研究の視点と方法

1　若者の移行過程研究の課題

今日の若者の移行過程は戦後高度成長期に形成されたそれとは異なる様相を呈するようになってきている。しかし，いかなる現実を若者たちが経験しているかは十分に理解されず，とりわけ社会変動にともなう若者の移行の変容が進み出した1990年代から2000年代にかけては，若者の置かれた状況の変化が踏まえられないまま，不適切な言説が流通するようになった。ニートやひきこもりの捉え方にはすでに疑義が出されているが，その一例である。ニートについていえば，その言葉の発祥の地であるイギリスの場合と異なり，失業者を除外してしまう「誤用」がなされたために，「働けない若者」というイメージが形成されてしまっているが，ニートとフリーター・失業者は不安定就労層として統一的にとらえられるべきものである（乾 2006b）。ひきこもりについても，それが取り上げられ始めてから短期間にさまざまに意味付与され，その概念は曖昧に揺れ動いている（工藤 2008）。不登校と高校中退についても，精神的な面での問題や逸脱といった見方ではなく，貧困・階層の影響を指摘する研究が出されるようになっている（岩田 2008）。このように今日の若者たちを類型化する複数のカテゴリーが流通しており，それらの中には若者たちの実相を捉え切れず，むしろ歪曲さえしているものもあるがゆえに，若者が経験している現実を正確に把握していくことが求められる。

若者の移行過程を把握しようとするには，まずマクロな視点からの量的な分析が重要になる。今日の若者がどのように学校から仕事へと移行しているのかを俯瞰することは欠かせない作業である。

今日の若者の移行パターンは過去から変化し，最近の研究では安定，準安定，準不安定，不安定の４つの類型に大きく分けられている。そこには家庭階層の影響が色濃く見られ（乾 2010，乾・本田・中村 2017），若者の移行過程は依然として階層構造による規定性が根強く存在しているとされる。人々の地位達成や社会移動が階層に規定されていることは，これまでにもSSM調査を始め，指摘されてきたが，標準的なライフコースが解体され，意識において個人の選択という主観的感覚が強まりながら，個々人の選択肢には社会構造的制約が強く働く「構造化された個人化（structured individualisation）」（Roberts 1994，乾 2010）の時代である現代において，特に若者がどのように自らの進路を「選択」し，あるいは「制約」を受けているのかを俯瞰的に明らかにしていくことが求められている。

戦後型青年期移行システムが解体された今日，とりわけ次のステージへとスムーズに進むことが難しい不安定，準不安定なパターンの若者たちがどのような移行を経験しているのかは重要な研究課題となる。そのためには，マクロな統計分析だけでなく，個別のケースを収集しながら，移行過程の質的な分析を行っていかなければ多様な環境に生きる若者たちの経験を捉えることは難しい。マクロな量的分析とミクロな質的分析の両者の知見を持ち寄り，統一的な移行像を築くことが必要である。

しかし，現代における若者の移行過程の把握は容易な作業ではなく，とりわけ質的な調査は種々の困難があり，多様な観点と方法でもって調査を進めていくことが期待される。本稿では不安定な若者層を高校中退という事象に的を絞って検討したい。ポストフォーディズムと経済のグローバル化を背景にした「格差社会」のもとで，就学の困難化や教育機会の不平等化が生じており（小林 2008，浅井 2008など），高校中退もそうした困難化，不平等化を表しているという指摘がなされている。高校中退がどのようにして生じ，その後当事者がどのような軌跡を辿っていくのかを検討することは，現代の若者の移行過程の実相を明らかにすることに寄与することができる。

なお，本稿は先に刊行した中間報告（北大高校中退調査チーム 2011）の続編である。中間報告では，北海道内都市部の高校中退経験者32人にインタビューを行い，また中退者の多く出ている高校への実情調査を行った。ただ，32名の多くは出身地・居住地が札幌市に偏り，また多くは学校教育関係者の紹介によったため，その後，道内地方のケース，また非常に深刻な困難に陥っているケースや教育関係ルートではないケースなどを追加してあらためて分析を行うこととした[1]。

2　高校中退研究の課題

早期離学が大きな教育問題となっている欧米と異なり，わが国では高校中退研究は多くなく，公的な調査も少ない。ここでは先行する調査と研究の主なものを紹介，検討する。

（1）国の調査

高校中退については，文部科学省が主に人数，比率と理由に関する簡単な調査を毎年実施，公表している（文科省「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」）。それによると，高校中退の比率は，この30年ほどの間で，最も高いときでも2.6％であり（1998，1999），2009年度には初めて２％を切って1.7％となった。同調査最新版における中退「事由」の内訳は（2016年度），学校生活•学業不適応が最も高く33.5％，次いで進路変更33.9％であり，以下学業不振8.2％，病気・けが・死亡4.4％，家庭の事情4.3％，問題行動等3.9％，経済的理由2.6％，その他9.2％となっている（文部科学省 2017）。しかし，この調査は主たる理由を１つ選択するという方式で学校が回答するものであり，本人の回答の集計ではない。またすでに指摘されているように，高校中退はこれらの理由が複合して生じると考えるのが自然であり，これで高校中退の要因を明らかにすることは難しい。

内閣府は，高校中退者と中学校不登校生徒の進路状況や必要な支援を把握するため，2008年に文部科学省の協力を得て緊急調査を実施している（内閣府政策統括官 2009）。これは高校中退理由について複数回答を認めており，結果は，高校の生活があわなかったから49.4％が最も高く，人間関係がうまく保てなかったから23.2％，高校の勉強が嫌いだったから20.8％，授業

についていけなかったから18.5%，進級できなかったから16.7%が上位を占める。文科省調査と異なるのは，学校生活不適応が非常に高く半数の回答者がこれを選択しており，進路変更が11.9%と低いこと，それに代わって人間関係の問題が上位に出てきており，また学業不適応，学業不振に相当する回答比率も高いことである[2]。

内閣府は2010年にも高等学校中途退学者調査を行い，報告書を作成している（内閣府2011）。全国の都道府県・政令市教育委員会を通じた郵送によるアンケート（学校等の協力が得られた地域で実施，3教委から協力得られず）であり，対象は2008年4月以降に高校を中途退学した者（中退後概ね2年以内）2,651人で，回答者は1,176人（44.4%），年齢は15〜20歳（16〜18歳が80%）であった。高校中退理由（複数回答）は，進級できそうにない54.9%，校則校風52.0%，勉強が分からない48.6%，人間関係46.3%，高校以外に興味あること36.3%，早く経済的自立30.0%，問題行動24.1%，第一希望高校でなかった20.8%，健康上の理由18.5%，経済的理由16.0%，仲の良い友人退学14.8%，妊娠4.0%，親にやめさせられた2.9%（数字はとても当てはまる＋まあ当てはまるの合計）となっており，これまでの調査と異なり，進級できそうにないが最多となっている。また現在していることとして，働いている56.2%，在学中30.8%，仕事を探している13.6%，家事手伝い11.1%，妊娠中・育児5.4%，何もしていない4.0%となっている。

これら内閣府調査は中退後の進路動向や支援ニーズも問うなどして有益な内容を得ており，重要な調査である。しかし，質問ごとに回答者を合計し，傾向や相関を捉える集計・分析方法であること，また面接調査も行っているが，中退者とその関連要素について多面的に整理しているため，中退に至る経緯やその後の進路等，ケースごとの経過と意識・支援要求等の把握がなされず，中退という事象が発生する要因の複合性やプロセスは見えにくい。

（2）先行研究

次にわが国の高校中退研究について取り上げる。高校中退について触れた一般向けジャーナル記事や書籍は相当数あるが，高校中退が発生する要因や背景，その後の進路等について考察したものは少なく，本稿にとって有益と考えられるのは次の4つの研究である。

1つは，小林剛の研究である（小林 1996）。小林らは，1990〜1992年に東海，近畿，北陸を中心に高校中退者187名に対してアンケートおよびヒアリング調査を行った（依頼総数218名，内121名にヒアリングも実施している）。分析の詳細は略すが，結論的にいえば，高校中退が発生する要因として「勉強がわからない」という「学力問題」が当事者に共通して内在していること，また「別の生き方がしたくて」「先生との関係」「問題行動」「なんとなくつまらなくて」などの中退理由は，硬直した生徒指導や不十分な生徒理解などに示される学校・教師側のあり方への生徒たちの失望を表しており，学業不適応と学校への不信が高校中退の根底にあるとされている。

2つめは，清田・黒崎の研究である（清田・黒崎 2001）。これは1970年代以降の東京都の高校中退動向の検討を通じて，高校中退を積極的な進路の修正・選択と捉える楽観的な教育論，および高校中退理由を「問題行動」と「学業不振」に求める先行研究（小林剛 1987）を批判したものである。東京都の高校中退動向は，①1970年代後半から全日制普通科で増加している，②中退理由は学校生活不適応と進路変更が大きな比率を占めるようになる，③中退を生み出す高校は底辺校だけでなく偏差値ランクの高い学校も含んですべての学校にわたっている，④し

かしまた中退を多く生み出しているのは偏差値序列の下位校であり，中退率と偏差値序列に相関があるといった変容が見られることから，高校中退は「偏差値レベルに象徴される高校教育の序列的構造という制度要因」に強く規定されたものであると主張している。

3つめは，青砥の研究である（青砥 2008）。青砥は長年の高校教員の経験を踏まえて，多数のケースを紹介し，また統計的データも用いて，高校中退者のほとんどが「日本社会の最下層で生きる若者たち」であると述べる。貧困家庭の子どもの進学先はいわゆる底辺校に集中しており，そこから多数の中退者が生まれていることから，高校中退は家族の貧困が最大の原因であると主張している。また同書は，単に所得の貧困だけでなく，低学力，学習意欲の欠如，基本的な生活習慣の訓練の欠如，人間関係の未成熟，アディクション，親からのDV・ネグレクト，貧困層の囲い込み政策（学区撤廃と選択制）を列挙して，これらの複合によって高校中退は生じているとしている。

清田・黒崎（2001）は，小林（1987）が1970年代までの高校中退が心身上の問題，非行問題，家庭の経済的な理由のいずれかによるものであったのに対して，1980年代の高校中退が質的に多様化していると「正しく」指摘しながら，結局はその原因として学業不振，不本意入学，問題行動をあげるにとどまっていると批判している。しかし，小林剛（1987）は入試学力の低い学校・課程において中退者が多いことから，高校中退は受験・選別体制の歪み，偏差値による輪切り体制という入試制度とも関わった極めて構造的な問題であるとも指摘している。つまり，清田・黒崎と小林は，偏差値によって序列化された画一的・選別的高校教育の体制に高校中退の本質的な要因を見るという点で実は共通しているのである（ただし，小林は単に高校教育の序列化というだけでなく，教師の生徒理解や授業方法，友人関係のあり方などを重視している）。

青砥も今日の高校教育のあり方の問題として貧困層の囲い込み政策を挙げており，清田・黒崎の指摘する「高校教育の序列的構造という制度要因」を否定しているわけではない。しかし，高校中退は高校の序列構造を教育政策の問題としながらも，下位校には貧困な家庭階層の子どもたちが学力的に選別されて集まってきているのであり，高校教育制度よりも家庭の貧困，階層を本質的な要因として捉えている。

確かに，貧困家庭の生徒すべてが高校を退学していくわけではない。生活保護や授業料免除，奨学金など，一定の支援制度もある。また高校の管理体制や教員の生徒への関わり方は，生徒の退学率に影響を与えているだろう。よって，中退問題を考える際に，高校教育のあり方を検討の俎上に載せることは不可欠といえよう。しかし，いったいどのような生徒が退学していくのかを考えようとすると，社会階層との関連について検討せざるをえない。近年の子どもの貧困問題等を背景に，教育機会の不平等を社会的排除の問題として追究する研究が増大しており，本稿でもそうした視点から高校中退を捉えたい。

上記の3つの先行研究の他には、多数の高校中退ケースを詳細に分析した有益な研究として乾・桑嶋他（2012）がある。これは内閣府が2010年に実施した高校中退者調査（内閣府2011）の調査票回答データ（1176名）をもとに、高校中退者の実態をより詳細に捉えるため行った再分析である。高校中退時点と中退後（中退からおよそ2年以内の調査時点）の2つの時点に注目し、それぞれにおいて高校中退理由別のグループ化と中退後の状況によるグループ化を行い、それと他の項目データを組み合わせて分析を行っている。調査対象者は中退理由によって怠学、経済的自立志向、経済的困窮、問題行動、健康問題、妊娠にグループ化され、また中退後の状況によって職探し中、働いている（正社員、フリーター・パート、家業手伝い）、在学中（高校、

専門学校、大学)、妊娠中•育児、家事•家事手伝い、特に何もしていないにグループ化される。そして前者のグループが中退後にどのような経過をたどったり、後者のグループがどのような将来展望を描いているかが分析されている。こうしたグループ化と経過分析は高校中退を特定の要因だけで説明したり、中退時点・中退理由のみを分析する研究に比べて中退者の存在様態をより正確に把握するものとなっている。

しかし、内閣府の調査設計自体の制約もあり、同論文にもいくつかの限界がある。第1に内閣府調査はアンケート調査であるため、同論文も言うように「一人ひとりの背景を詳細に汲み取ることは不可能である」(乾・桑嶋他 2012, p.26)。アンケートの集計結果の量的分析によるグループ化などは行われているが、個々のケース分析は行われていない。第2に調査は中退後の概ね2年間以内の者を対象に行われており、中退後の経過分析を行うにも経過した期間が非常に短いという難点がある。第3にアンケートの回答から調査対象者が中退後の調査時点においてどのような自己イメージをもっているかという点を重視した分析をしているため、階層的な視点からの分析が行われていない。本人が中退やその後の経過をどう評価しているかは中退理解のために重要な視点であるが、そうした意識がいかにして生まれているかという視点も重要であり、そのためには中退者が置かれている環境・条件とそのもとでの中退の前後にわたる経過を分析する必要がある。

3　本研究の視点と方法

以上のような先行研究・調査の検討から，高校中退を把握するためには，次のような点を重視する必要があると考える。

第 1 に，高校中退をあらためて社会階層との相関から把握することである。高校中退と貧困の関係を重視する青砥の著書は重要な位置にあるが，そこで紹介される困難事例の位置は必ずしも明瞭ではない。階層的な要因は高校中退にどのように表れるのかを見る必要がある。

第 2 に，上と重なるが，高校中退を社会的排除の視点から捉えることである。バラ＆ラペールは貧困という概念よりも社会的排除という概念の方に優位性があるとし，その理由として 1 つにそれが剥奪の多次元的な特徴に焦点を当てることで，人々が剥奪され続ける累積的要因を明らかにできる， 2 つにそれは剥奪を動態的な諸要因の結果として分析することができることの 2 点をあげている（Bhalla and Lapeyre 2004)。高校中退は貧困のみで説明できない。中退はそれをもたらす多次元的な要因とその構造を階層や社会制度などを踏まえつつ明らかにする必要がある。

第 3 に，上と関わって，高校中退を中退の前後を通して一連のプロセスとして捉えることである。これまでの調査・研究は，中退時点あるいは中退後の一時点のみに注目してそれが発生した要因を明らかにしようとする傾向があった。しかし，所得の貧困と社会的排除の概念を区別し，大人の貧困な生活は子どもの時の貧困だけで決まるのではなく，不利の積み重ねを通じて生み出されるとする阿部（2007）や上のバラ＆ラペールの指摘を踏まえるならば，事態を“プロセス”として捉える必要がある。高校中退も，それが生起するプロセス，さらには中退後の進路と生活も見なければ，高校中退という現象を捉えきることはできないであろう。

この点についてはブルデューの社会空間論も有用である。ブルデューは社会空間を資本量，資本構造（経済資本・文化資本)，軌道の 3 つの次元で把握しようとする（Bourdieu 1979)。その人の社会的位置を明らかにするには，どのような資本をどの程度もっているのかが重要な

要素となる。また社会空間における最初の位置とその後の位置の間（最初の資本と到達資本の関係）にはばらつきがあるため，軌道を社会空間把握の次元に組み込むことが不可欠となる。

第4に，高校中退経験者がその後の人生において中退をどう意味づけているのかを明らかにすることも，高校中退把握にとって重要である。ギデンズによれば，現代は伝統や儀礼，ルーティンが自明ではなくなった再帰的近代化の時代，ハイモダニティの時代であり，個人化が進むとともに，個人の存在論的安心が失われていく（Giddens 1991）。こうした再帰的近代化の時代においては，若者がどのような自己アイデンティティを形成し，意味世界を構築しているのかを明らかにしていくことも重要な意味をもってくる。若者の移行過程を把握するには，社会構造の規定性について検討することに加えて，個人化のもとでの若者たちの実存の変容にも注目する必要が生じているのである。高校中退の要因論だけを語ることは，意図せずして当事者の能動性や主体性を否定することにつながりかねない。高校中退現象は，社会構造・制度に規定されているが，当事者の意識，認識を考察しなければ，若者たちの移行の困難を理解し，また彼らが未来を切り開いていく可能性を見出すことは難しい。本稿では高校中退調査の難しさからこれを深く検討できなかったが，当事者の高校中退認識について聞き取るよう努めた。

以上のような問題意識と課題認識から，本研究では高校中退経験者を対象に中退前から中退後の調査時点に至るまでの経過を聞き取るインタビュー調査を試みた。調査方法の詳細は次節に譲る[3]。

Ⅱ　調査の対象と方法

本調査の対象は，北海道に暮らしている高等学校中途退学経験をもつ若者たちである。高校中退経験者の場合，十分な量の対象者を無作為で抽出することは困難である。大規模な若年世代の統計調査を行い，その中に含まれている中退経験者を抽出する方法を採っても，抽出した中退経験者が調査に協力してくれる保障はない。本調査では学校教育や社会福祉の関係者，経営者団体，労働組合等からの紹介を受けた他，SNSでのインタビュー協力者の募集という方法を採った。その際，一部の団体に偏らないようにした。また中退経験についてインタビューに答えられるということは現状が相応によい状況にある人が多いかもしれないため，深刻な困難に置かれた者が利用する生活自立支援機関，高卒資格がないまま働ける職場などの協力を得た。また地域も，北海道の中心にある政令指定都市札幌市（人口約200万人）だけに偏しないよう，道内他都市にも範囲を広げ，地方居住者をサンプルに組み入れるようにした。

紹介を受けたのは，主に（ⅰ）高校教諭・フリースクール・不登校親の会・専門学校職員などの教育関係者，（ⅱ）若者サポートステーション・社会的困難者支援NPO・労働組合などの社会団体の職員，（ⅲ）企業経営者団体会員である。他に（ⅳ）SNSを利用した募集を行い，（ⅴ）インタビュー対象者および調査者の知人からも紹介を受けた。調査対象者の年齢は，10代終わりから30代前半までである。インタビューは2010年5～9月と2012年5月～2013年4月に実施し，67件のインタビューを行った。このうち，実際には高校でなく高等専門学校の中退者であったなど，本調査の要件に該当しない3件を外し，分析の対象は64ケースとなった。

聞き取り内容は家庭環境，小学校から高校までの学校経験，特に高校での状況と高校中退の

表1　ケース一覧

番号	男女	年齢	居住地	現在の状況（就労・在学等）	学歴	中退後の主な経路	中退校の学力的位置と課程・学科	高校所在地	主な中退理由	中学校時代	家計状況	父・職業等	父・学歴	母・職業等	母・学歴	調査経路
1	女	18歳	札幌市	無職（フリースペース利用）	高校中退	在宅で病気療養→作業所→フリースペース，日雇いアルバイトを始める	下位（公立・全日・普通）	札幌近郊	学校の対応（病気に対応できない）	病気で長期入院	やや厳しい	会社員（建設）	高卒	専業主婦	不明	i
2	女	18歳	札幌市	正規雇用（介護）	高卒	フリースクール高等部・併設通信制高校入学・卒業→正規雇用	下位（公立・全日・普通）	札幌市	友人関係，教師の対応	小学校時代から女子グループに嫌気，中学部活も人間関係で退部，成績下がる	やや厳しい	会社員（生活関連サービス）	高卒	パート	高卒	i
3	男	19歳	札幌市	定時制高校３年生	高校在学中	公立全日制高校再入学→同校中退→公立定時制高校再入学・アルバイト	下位（公立・定時・普通）	札幌市	心身不調（交際関係），喫煙による停学	勉強せず，喫煙，いじめで中１～２は数ヶ月の不登校	厳しい	幼少期に離婚→継父死別	不明	会社員（休職中）	不明	i
4	女	23歳	札幌市	登録型派遣（娯楽）	高卒	アルバイト→フリースクール高等部・併設通信制高校入学→卒業→登録型派遣	下位（私立・通信制・普通）	札幌市	友人関係（女子グループのもめ事），校外交友関係中心生活	生徒会，クラスまとめ役，母教育熱心	やや厳しい	会社員（営業職）	大卒	パート	大卒	i
5	女	20歳	札幌市	専門予備校生	高卒	結婚・出産・アルバイト・ホステス→離婚→アルバイト・高認取得・専門予備校	下位（公立・全日・普通）	札幌市	家計困窮＋父親の入院	生活保護，非行，学校は楽しい，勉強しなかったが点数は取れた	厳しい	無職（前職：自動車整備）	中卒職訓	パート	中卒	i
6	女	20歳	札幌市	アルバイト（販売）	高卒	フリースクール高等部＋高認取得→アルバイト	下位（私立・通信制・普通）	札幌市	友人関係（女子クラスのもめ事）	勉強嫌い，ジュニアリーダーで交友関係	厳しい	中学生時離婚（自営業・建設）	中卒	パート	中卒	i
7	男	30歳	札幌市	無職（若者サポステ利用）	高校中退	アルバイト（短期→長期）→無職・若者サポステ利用	下位（公立・全日・普通）	札幌市	クラスに馴染めず，高１夏休み明けから不登校	いじめ，中３から不登校，塾は続ける	厳しい	無職（通院中，前職：建設）	中卒	パート	中卒	ii
8	男	22歳	札幌市	大学４年生	大学在学中	フリースクール高等部・併設通信制高校入学・卒業→大学進学	中位（公立・全日・普通）	釧路市	友人できず，無気力感，仮病で欠席，２年生で単位不足	転校で友人できず成績低下，両親と別居→親戚宅へ，再度転校し成績回復，通塾	やや厳しい	継父	高卒	会社員	短大卒	i
9	男	22歳	札幌近郊	大学４年生	大学在学中	フリースクール高等部・併設通信制高校入学・卒業→大学進学	下位（私立・全日・普通）	札幌近郊	クラスでの嫌がらせ，いじめで不登校	授業受けるのが面倒で欠席増，中２の２学期から不登校，中３からフリースクールへ	ゆとり有り	会社員（エネルギー）	高卒	パート	高卒	i
10	女	20歳	札幌市	正規雇用（介護）	高卒	公立定時制高校入学・卒業→正規雇用	下位（公立・全日・定時・普通）	札幌市	校外友人と遊び中心生活	２年生クラス替えで友人減る，勉強嫌い	厳しい	離婚	不明	自営業（飲食）	大学中退	ii
11	女	22歳	札幌市	正規雇用（医療）	専門学校卒	予備校→高認取得→専門学校→正規職→アルバイト・パート→正規雇用	下位（公立・全日・普通）	札幌市	友人関係，学習意欲なし，教師への不信	学校は楽しくなく友人なし，中学２～３年生で不登校，塾は友だち多く通い続ける	不明	離婚	不明	会社員（製造）→定年後パート	高卒	v
12	男	19歳	旭川市	派遣（建設）	高校中退	アルバイト・派遣などの短期就労（接客→運送→建設）	下位（公立・全日・普通）	旭川近郊	教員との関係，喫煙・器物破損・喧嘩などで停学，長距離通学	勉強分からずやらない，学校は落ち着いていた	やや厳しい	会社員（運輸）	中卒	専業主婦	中卒	v
13	女	22歳	札幌市	大学４年生（休学中）	大学在学中	通信制高校中退→通塾・高認→大学進学→休学，アルバイト（接客）	中位（公立・全日・普通）	北見市	教師の対応	中２でいじめで不登校，心身不調	ゆとり有り	管理職（医療）	短大卒	管理職（医療）	専門卒	iv
14	女	23歳	札幌市	子育て中，パート	高校中退	結婚・出産→夫の実家同居子育て＋パート	下位（公立・全日・定時・普通）	札幌市	妊娠・結婚	勉強嫌い，地元友人と遊ぶ，母病気で生活保護	厳しい	不在	不明	無職 病気がち	中卒	i
15	男	25歳	札幌市	求職中	高校中退	アルバイト→正規（建設）→接客業→建築業→派遣→求職中	下位（私立・全日・工業）	札幌市	学習意欲なし，単位不足，父親との対立	転校で勉強より友人づくり中心，父が娯楽取り上げ，反発して勉強せず	やや厳しい	会社員（サービス）→失業→不明	専門卒	継母	大卒	iv
16	男	28歳	札幌市	高校科目等履修生，アルバイト（販売）	高卒	通信制高校入学・卒業→アルバイト→単身転居→大学浪人（高校科目等履修生）・アルバイト	下位（私立・全日・普通）	茨城県	志望校落ちて不本意入学，長距離通学，管理的指導	勉強意欲はあったが成績低い	ゆとり有り	会社員	不明	専業主婦	不明	i
17	女	17歳	札幌市	アルバイト（休職中）	高校中退	アルバイトを転々→怪我で休職中，児童会館を時々利用	下位（公立・全日・普通）	札幌市	教師の管理的指導，学習意欲なし，バイトとの両立困難，長距離通学	勉強嫌い，中３はほとんど登校せず，遊び	やや厳しい	死別	高卒	パート	高校中退	ii
18	女	17歳	札幌市	アルバイト（販売）	高校中退	専門学校進学希望あったが，高学費のため諦める→アルバイト，児童会館を時々利用	下位（公立・全日・普通）	札幌市	教師・学校不信，学校の荒れ，バイトしたい	勉強苦手，中２から遊び，不登校，補導	やや厳しい	不在	不明	パート	高卒	ii
19	男	25歳	札幌市	正規雇用（営業）	高校中退	アルバイト（飲食）→非正規雇用（建設）→正規雇用（営業）	下位（私立・全日・工業）	札幌市	単位不足，学歴・学校教育無用の考え	勉強嫌い，部活打ち込む	ゆとり有り	会社員	専門卒	パート	高卒	v
20	女	21歳	札幌市	自由業（音楽）	専門学校卒	公立通信制高校・アルバイト→専門学校進学→音楽関係で働く	上位（公立・全日・普通）	北見市	学業不振，夜遊び	中学校は友だちみな仲がよく楽しい	ゆとり有り	離婚	不明	自営業	大卒	v
21	女	21歳	札幌市	大学３年生	大学在学中	公立通信制高校入学→中退→アルバイト→通塾・高認→大学進学	上位（公立・全日・普通）	北見市	学校の雰囲気，校外友人関係で遊び，１年生冬から不登校	成績よく，友人・教師との関係もよい	ゆとり有り	会社員（金融）	大卒	パート	専門卒	v
22	女	18歳	旭川市	登録型派遣，家業手伝い	高校中退	登録型派遣＋家業手伝い（建設・事務補助）	下位（私立・全日・普通）	旭川市	友人関係（女子グループの対立）	生徒指導厳しい，友人・教師関係は良好，部活	ゆとり有り	自営業（建設）	高卒	専業主婦	高卒	v
23	女	18歳	旭川市	家事手伝い	高校中退	アルバイト→家事手伝い	下位（私立・全日・普通）	旭川市	学校の雰囲気，友人関係（女子グループ内の対立）	いじめあったが，全体として充実した中学時代，学力不足で志望校変更	ゆとり有り	自営業（製造）	中卒	パート	高卒	v
24	女	28歳	旭川市	パート（福祉関係）	高校中退	アルバイト→出産→パート→出産→ヘルパー資格取得→福祉関係	下位（公立・全日・普通）	旭川近郊	経済的理由（母病気），長距離通学，学習意欲なし，バイト面白い	教師への不信，荒れ，中３時教師の支えで高校進学，経済面・学力面で志望校選択	厳しい	不在	不明	保育士＋パート	短大卒	v
25	女	29歳	旭川市	パート（福祉関係）	高校中退	アルバイト→正規雇用（接客）→ヘルパー資格取得→福祉関係	下位（私立・全日・普通）	旭川市	学業不振，遊び・問題行動，単位不足，長距離通学	友人もでき良い中学生活，中２で半年入院，勉強付いていけない	厳しい	離婚	不明	パート	高卒	v
26	女	30歳	旭川市	事務手伝い（建設）家業手伝い（飲食）	高校中退	アルバイト→契約社員→パート→事務手伝い（建設）＋家業手伝い（飲食）	下位（私立・全日・商業）	旭川市	両親の離婚，経済的困窮	友だち多く，先生とも良好，部活熱心で楽しい学校生活	厳しい	離婚（技術職）	高卒	飲食＋パート	高卒	v
27	女	21歳	札幌市	専門学校１年生	専門在学中	公立定時制高校入学・卒業→専門学校進学	中位（公立・全日・普通）	札幌市	友人関係（クラス集団への馴染めなさ）	よい友人関係，楽しい学校生活，小６より塾，就きたい職業も見つかり，推薦で高校入学	やや厳しい	会社員（販売）	大卒	パート	高卒	v
28	女	25歳	札幌市	アルバイト（接客）	高校中退	アルバイト転々	下位（公立・全日・普通）	札幌市	学業不振，学習意欲なし，学校の荒れ，学校・教師不信	クラスは仲がよかった，勉強せず成績低い，勉強の意味見いだせず，悩んだ末の進学	比較的安定	会社員（販売）	大卒	専業主婦→パート	大卒	iv
29	男	20歳	札幌近郊	大学２年生	大学在学中	私立通信制高校卒→大学進学	下位（私立・全日・普通）	札幌市	教員とのトラブル，退学処分	中３時に友だちの保護者に家庭のことを噂され苦痛，他校の友人が支え	比較的安定	離婚	不明	無職	高卒	iv
30	男	19歳	札幌市	アルバイト（卸売り業・配送）	高校中退	アルバイト転々	下位（私立・全日・普通）	札幌市	経済的困難，母病気	いじめ，勉強苦手，スポーツ教室・児童会館通う	厳しい	不在	不明	パート→無職	中卒	ii
31	男	26歳	札幌市	大学１年生	大学在学中	公立通信制高校編入→休学→フリースペース等→復学・卒業→大学進学	下位（公立・定時・普通）	札幌市	中学からの不登校	小学校から休みがち，中学校は不登校，母は親の会参加，流れで高校受験	ゆとり有り	公務員	大卒	パート→入院中	専門卒	v
32	男	22歳	札幌市	通信制高校３年生	高校在学中	アルバイト転々→公立通信制高校	下位（公立・全日・普通）	空知管内	他校生徒との喧嘩で停学，教員関係，不登校	両親不和，いじめ，中２不登校，中３で担任替わり登校，勉強の遅れ	やや厳しい	会社員（製造）→失業→運輸	中卒職訓	専業主婦	高卒	v
33	男	35歳	札幌市	アルバイト（レンタルショップ・清掃業）	高校中退	アルバイト転々→札幌へ移住（当初の目的は専門学校進学）→アルバイトを転々	中位（公立・全日・普通）	宮城県	喧嘩による無期停学，学業不振	授業サボる，無免許バイク，成績は悪くない	ゆとり有り	管理職（金融）	高卒	会社員（金融）	高卒	iii

35	男	31歳	札幌市	日雇いアルバイト（支援NPO入所）	高校中退	暴走族→出稼ぎ・アルバイト（接客）→児童自立支援施設→路上生活→生活困難者支援NPO入所，日雇いアルバイト	下位（私立・全日・普通）	福岡県	喧嘩，暴走族への加入	学校に行かず，地元交友関係，喧嘩，バイク	比較的安定	管理職（建設）	中卒	専業主婦	不明	ii
36	男	30歳	札幌市	求職中（支援NPO入所）	高校中退	正社員(建設)→アルバイト・派遣(各地転々)→無職→生活困難者支援NPO入所，求職中	下位（公立・全日・農業）	十勝管内	友人無し，学校が楽しくない，学習意欲なし	勉強面白くなかった	比較的安定	会社員（営業）	高卒	専業主婦	中卒	ii
37	男	21歳	札幌市	アルバイト（接客）（支援NPO入所）	高校中退	アルバイト（建設・接客）→児童自立支援施設→路上生活→生活困難者支援NPO入所，生活保護→アルバイト	下位（公立・全日・普通）	札幌市	学習意欲なし，単位不足	父仕事で不在勝ち，夜に外出，保健室登校	やや厳しい	会社員（運輸）	不明	乳児期に離婚	不明	ii
38	男	28歳	札幌市	土木業に就職予定（支援NPO入所）	高校中退	バイト→正規（製造）→派遣→正規雇用（配送，6年間）→無職→派遣→北海道へ，派遣→無職	下位（公立・全日・工業）	千葉県	バイト中心の生活，単位不足，長距離通学	父とは疎遠，母と仲がよい，タバコで指導，仲間と悪さ・遊び，勉強嫌い	比較的安定	会社員（運輸）	高卒	専業主婦	高卒	ii
39	男	22歳	札幌市	アルバイト（飲食）	高校中退	無職→アルバイト転々→派遣・契約社員（倉庫）→無職→アルバイト	下位（私立・全日・普通）	茨城県	複雑な家庭環境のため高卒考えられず	休みがちで中３は不登校，成績低い，非行	やや厳しい	就学前に離婚	不明	小学生時に死別	高卒	ii
40	男	22歳	札幌市	求職中（支援NPO入所）	高校中退	非行で児童自立支援施設→派遣・正規・アルバイト（建設）・無職→生活困難者支援NPO入所	下位（公立・全日・普通）	日高管内	遊び，学業不振，学習意欲なし	父死亡で親戚宅へ，いじめで不登校，勉強せず	やや厳しい	中学生時に死別	不明	乳児期に離婚	不明	ii
41	男	18歳	札幌市	季節雇用（建設）	高校中退	アルバイト（建築）→契約社員（製造）→季節雇用（建設）	下位（公立・全日・普通）	札幌近郊	学業不振，学習意欲なし，友人できず	勉強嫌い，友だちおらず学校楽しくない	比較的安定	会社員（運輸）	中卒	会社員（保険）	高卒	iii
43	女	23歳	札幌市	アルバイト（接客）	高校中退	アルバイト（飲食，接客など）→交際相手と道外へ→札幌，出産（未婚）→アルバイト（接客）	中位（私立・全日・普通）	札幌市	友人関係トラブル，対教師関係で停学，学業不振，遊び	喧嘩を繰り返す，部活先輩中心にグループで行動，勉強嫌い	比較的安定	幼児期に離婚（公務員）	中卒	パート	高卒	iii
44	女	17歳	札幌市	アルバイト（飲食）	高校中退	アルバイト(飲食，高校在学中から継続中)	下位（私立・通信制・普通）	札幌市	学習意欲なし，友人関係がつまらない	先生と揉めて不登校→フリースクールへ	厳しい	小学生の時に離婚(会社員・販売)	高卒	会社員（建設）	高校中退	i
45	女	24歳	札幌市	アルバイト（接客）	高校中退	アルバイト（接客，飲食など）→無職（療養）→アルバイト（接客）	下位（公立・定時・普通）	札幌市	学習意欲なし，学業不振，喧嘩	両親から勉強強要，家出，喫煙，いじめ，学校は給食時間だけ，キャバクラバイト，校外友人と遊び	比較的安定	会社員（調理）	高卒	パート	中卒	iii
46	女	20歳	札幌市	パート（娯楽）	高校中退	アルバイト（販売）→無職→アルバイト（娯楽）	下位（私立・全日・普通）	札幌市	学習意欲なし，単位不足，経済的理由	転校し，女子グループになじめず，勉強もスポーツも意欲無くす	厳しい	中学生時に離婚（会社員・販売）	高卒	会社員（建設）	高校中退	i
47	女	24歳	札幌市	正社員（娯楽），アルバイト（接客）	高校中退	アルバイト（販売，飲食，接客など）→数年前から友人飲食店開業（正社員），アルバイト（接客）	下位（私立・全日・普通）	札幌近郊	遊び，単位不足	勉強嫌い，成績低い	厳しい	小学生の時に死別	不明	パート→自営業	高校中退	iii
48	女	25歳	札幌市	アルバイト（宅配）	専門学校卒	公立通信制高校編入→専門学校→実家近くで一人暮らし，アルバイト	下位（公立・単位制・普通）	札幌市	単位不足，体調不良	習い事多数，不登校，クラスの雰囲気悪い，学習意欲なくす，部活がんばり心身不調に	ゆとり有り	管理職（情報通信）	大卒	専業主婦	大卒	i
49	男	24歳	釧路市	正規雇用（介護）	高卒	住込みアルバイト（ホテル）→正社員（販売）→派遣（製造）→正規雇用（介護），高認取得	中位（公立・全日・普通）	釧路市	遅刻欠席で１年留年，２年生で喫煙	保育園～小４年不登校・小５～６年教育支援センター，中学校皆勤，塾で勉強	厳しい	幼児期に離婚（小学生時に死去）	不明	パート	高卒	ii
50	女	31歳	釧路市	有期雇用（ＮＰＯ事業スタッフ）	高校中退	無職→ＮＰＯの就労支援事業を利用→ＮＰＯ事業スタッフ	中位（公立・全日・普通）	釧路市	学習意欲なし，心身不調による不登校，単位不足	学校楽しくない，いじめ多く孤立	ゆとり有り	専門職（医療）	大卒	専業主婦	大卒	ii
51	男	18歳	釧路市	無職(NPOボランティア参加)	高校中退	無職，ＮＰＯのボランティア活動に参加	下位（公立・定時・普通）	釧路市	心身不調による欠席，単位不足	幼児期父虐待，中学部活教員の指導で心身不調，不登校，NPOで学習支援受ける	厳しい	幼児期に離婚	中卒	自営業	高卒	ii
52	女	27歳	釧路市	無職（生活保護，支援NPO利用）	高卒	公立定時制高校転入・卒業→パート（製造，医療・介護）→結婚・出産→病気入院・離婚→パート（飲食）→無職	下位（公立・全日・商業）	釧路市	学校の雰囲気，保健室登校，単位不足	友人・教員とよい関係，生徒会，中３で成績下がる	比較的安定	会社員（鉄鋼）	技専卒	専業主婦（親の介護）	専門卒	ii
54	男	31歳	釧路市	正社員（建設）	高校中退	アルバイト（建設，父親が経営の会社）→正社員（同），職業訓練校（技能士）	下位（公立・定時・普通）	釧路市	単位不足（仕事のため欠席）	勉強より遊びに向かう，部活仲間と遊ぶ，塾に通ったが勉強理解できず	ゆとり有り	自営業（建設）	中卒	専門職（医療）	高卒	iii
55	男	25歳	釧路市	無職（生活保護，支援NPO利用）	高校中退	アルバイト（農業・漁業・製造）→無職→家庭内不和→生活困窮者支援NPO施設入居→結婚	下位（公立・全日・普通）	釧路市	喧嘩による停学，単位不足（成績），学習意欲なし	父の暴力・対立，喧嘩，喫煙，飲酒，午後から登校	厳しい	不明	不明	高校入学後に離婚(パート)	高卒	ii
56	女	24歳	釧路市	子育て中（生活保護，支援NPO利用）	高校中退	児童相談所→児童自立支援施設→生活困窮者支援NPO施設入居→結婚	下位（公立・全日・普通）	釧路市	校外でのトラブル	両親不和で八つ当たりされ家出，子育て放任，いじめ	やや厳しい	自営業（清掃）	不明	パート	不明	ii
57	男	18歳	釧路市	定時制高校１年生	高校在学中	ＮＰＯの学習支援受ける→公立定時制高校（在学中）	下位（公立・定時・普通）	釧路市	経済的困難で欠席多く，留年	両親離婚後生活保護，母親の浪費，小学校休みがちで勉強付いていけず，中学校１年後半から教育支援センター	厳しい	離婚（技術職）	高卒	無職	高卒	ii
58	男	23歳	釧路市	無職(NPOのボランティア参加)	高卒	無職→公立定時制高校再入学・卒業→職業訓練（介護，医療）→アルバイト→無職，NPO社会支援事業ボランティア	下位（公立・全日・普通）	札幌市	友人無し，彼女との破局，単位不足	家族で旅行・キャンプなど，習い事，塾，中学は楽しかったがたまに面倒で欠席	厳しい	高校入学後に離婚（失業）	大卒	パート	大卒	ii
59	男	21歳	釧路市	通信制高校３年生（生活保護）	高校在学中	バイト（販売）→無職（短期アルバイト数回）→生活を立て直すために移住→公立通信制高校入学	下位（公立・定時・普通）	札幌市	学費滞納	中学では友だちできず楽しくない，中１夏休み後から不登校	厳しい	建設（転職多数）	高卒	小学生時に死別	専門卒	ii
60	男	19歳	釧路市	無職（生活保護）	高校中退	アルバイト（飲食）→家を追い出され，ホームレス・ネットカフェ→児童相談所→児童自立支援施設→生活困窮者支援NPO施設入居	下位（公立・全日・普通）	釧路管内	彼女との破局，単位不足	学校嫌い，３年生部活終わった夏から不登校	厳しい	無職生活保護	中卒	幼児期に離婚	不明	ii
61	女	25歳	札幌市	自営業（飲食）	高校中退	家を追い出され親戚宅へ→１人暮らし，アルバイト（娯楽，飲食）→飲食店開業	中位（公立・全日・普通）	札幌市	学校外交友関係，非行，怪我による退部	親と不仲，喫煙，喧嘩，飲酒，非行，成績はよい，親の進路希望に反感	比較的安定	技術職（医療）	不明	技術職	不明	iii
62	男	22歳	札幌市	アルバイト（接客）	高校中退	ニート（２～３年）→アルバイト，一人暮らし	下位（公立・定時・普通）	札幌市	学習意欲なし，喫煙，他校生徒との暴力事件により退学処分	勉強嫌い，友だちとの遊び，喧嘩	比較的安定	幼児期に離婚	不明	自営業（販売）	不明	iii
63	男	21歳	札幌市	アルバイト（接客）	高校中退	アルバイト（倉庫業，建築業），冬期アルバイト（接客）	下位（公立・定時・普通）	札幌市	生徒グループ同士の喧嘩で無期停学	母と会話無し，中１から不登校，夜はゲームセンター等で遊ぶ，喫煙，勉強嫌い	厳しい	幼児期に離婚	不明	接客業→無職，生活保護	中卒	iii
64	男	23歳	札幌市	正社員（飲食）	高校中退	アルバイト（建築）→正社員（飲食），この間，結婚→離婚→再婚→離婚(子どもあり)	下位（公立・全日・普通）	札幌市	学業不振，学習意欲なし，欠席多く，２年次進級直後に退学	勉強嫌い，放課後は他校生徒と喧嘩，友だちと喫茶店など	比較的安定	小学生時に離婚	不明	会社員	不明	iii
65	女	22歳	札幌市	アルバイト（接客）	高校中退	家を追い出され友人・彼氏宅へ，アルバイト（営業，接客）→一人暮らし	下位（公立・全日・普通）	札幌市	学習意欲なし，厳しい生徒指導，２年次に友人と別クラスで欠席増	親の虐待，中２から遅刻頻繁，中３不登校	比較的安定	会社員（建設）	高卒	パート	高卒	iii
66	女	22歳	札幌市	アルバイト（販売），芸能レッスン	大学中退	高校再入学・卒業→私大→退学→アルバイト（飲食，販売），芸能レッスン	中位（私立・全日・普通）	旭川市	学校・寮での人間関係から心身不調	中学は荒れで，規則厳しく息苦しい	ゆとり有り	宗教団体職員	大卒	専業主婦	大卒	i
67	男	21歳	札幌市	専門学校２年生	専門学校在学中	引きこもり（４ヶ月）→アルバイト（建設）→通信制高校２年次編入・卒業→専門学校	下位（公立・全日・普通）	札幌市	部活で怪我，喫煙停学，退部で在学意欲喪失	勉強の意味に疑問もち，勉強しなくなる，中学はほぼ皆勤	比較的安定	小学生時に死別	不明	会社員	高卒	i

注　１）ケース29，42，53は調査対象の要件に該当しないため本報告の分析対象からは除いている。　２）情報は適宜改変している。
３）調査経路は，ⅰ）高校教諭・フリースクール・不登校親の会・専門学校職員などの教育関係者，ⅱ）若者サポートステーション・社会的困難者支援NPO・労働組合などの社会団体の職員，ⅲ）企業経営者団体会員，ⅳ）SNSを利用した募集を行い，ⅴ）インタビュー対象者および調査者の知人紹介，である。

経緯，中退時の意識と生活，中退後の進路と生活，現在の仕事・教育・生活等の状況，当事者による中退評価・解釈，中退時・後に求める支援であり，半構造化インタビューを行った。インタビュアーは，本稿執筆者を始め，大学教員，院生，学生が２～３名である。インタビュー実施場所は大学，フリースクール，児童会館，若者サポートステーション，社会的支援NPO，企業事務所，ファミリーレストラン，喫茶店等の店舗である。インタビュー時間は１時間30分から２時間30分程度である。

本調査のインタビュー方法は，対象者に過去を振り返ってもらう回顧型のインタビューである。この方法は，回答者の語りの構築性という限界をまぬがれない。しかし，高校中退経験者に対してパネル調査を行うことは不可能である。調査方法としては限界があるが，中退をはさむ前後のプロセスを明らかにするための質的調査の方法としてインタビューは有効な方法の１つであると考えた。インタビュー内容は上述のように中退前からの家庭，学校，仕事，友人等の人間関係の主な出来事やデータ等であり，これらの情報を丁寧に聞くことで話し手の内容が恣意にわたらぬように配慮し，事実確認を重視してインタビューを行った。

Ⅲ　ケース分析――進学・就労面から

１　64ケースの属性等の概観

本調査の64ケースの一覧は，表１に掲げた（プライヴァシー保護の点から一部，情報を変更している）。まずこの64人の属性等を簡単に整理しておく。

対象者の性別内訳は男性32人，女性32人である。年齢構成は，10代後半14人（21.4）％，20代前半31人（48.9％），20代後半12人（18.8％），30代前半７人（10.9％）である。年齢別の男女内訳は表２の通りである。対象者の居住地は，表３の通り，札幌市・近郊47人，旭川市・近郊６人，釧路市・近郊11人である。

表２　調査時年齢

	10代後半	20代前半	20代後半	30代前半	計
男	7	14	6	5	32
女	7	17	6	2	32
計	14	31	12	7	64

表３　調査時居住地

	札幌市・近郊	旭川市・近郊	釧路市・近郊	計
男	23	1	8	32
女	24	5	3	32
計	47	6	11	64

調査時点での就労・在学等の状況を示したものが表４である。家業手伝いも含めて何らかの形で就労している者は40人におり，全体の62.5％である。調査時点での学歴は，表５の通りであり，高校中退のままの者が39人，全体の６割になるが，高卒以上の学歴を取得した者，取得

しようとしている者は4割に上る。

表4　調査時の就労・在学等の状況

	正規雇用	非正規雇用（求職中含む）	自営業・自由業	家業手伝い＋非正規雇用	家事手伝い	子育て
男	4	13	0	0	0	0
女	3	16	2	2	1	2
計	7	29	2	2	1	2

	無職	高校在学中	専門学校在学中	大学在学中	予備校・高校科目等履修生	計
男	5	4	1	4	1	32
女	2	0	1	2	1	32
計	7	4	2	6	2	64

表5　調査時の本人学歴

	高校中退	高校在学中	高卒	専門在学	専門卒	大学在学中	大学中退	大学卒	計
男	20	4	3	1	0	4	0	0	32
女	19	0	6	1	3	2	1	0	32
計	39	4	9	2	3	6	1	0	64

注）高卒学歴には高校へ再入学せず，高認を取得した者が3名（男1・女2）含まれている。

家族構成のうち，父親，母親の有無を見たのが表6である。父不在が25人，39.1%と多く，両親がいるのは全体の約半数である。父母の学歴を見ると（表7），父親の場合，大卒•短大卒•専門学校卒13人，高卒・技専卒・職訓卒19人であり，半数は高卒以上の学歴をもっている。母親の学歴は，同じく15人，23人で，約60%が高卒以上である。家庭の経済状態は，「厳しい」，「やや厳しい」を合わせると30人，52.6%である（注，家庭の経済状態は，インタビューで親の職業や収入を尋ね，経済的な面の生活状況も確認した上で判断したものであるが，曖昧さが含まれている。）。

表6　親の有無

家族	父不在	母不在	両親あり	両親とも無し	計
男	11	4	15	2	32
女	14	0	18	0	32
計	25	4	33	2	64

注）不在には死別と離婚で同居していない場合が含まれる。離婚してもたまに会う関係にある場合もある。

表 7　親学歴の状況

	父大卒・短大卒・専門卒	父高卒・技専卒・職訓卒	父中卒・高校中退	父学歴不明	父学歴計
男	5	8	6	13	32
女	8	11	3	10	32
計	13	19	9	23	64

	母大卒・短大卒・専門卒	母高卒	母中卒・高校中退	母学歴不明	母学歴計
男	5	12	5	10	32
女	10	11	8	3	32
計	15	23	13	13	64

表 8　家庭の経済状態

	厳しい	やや厳しい	比較的安定	ゆとり有り	不明	計
男	11	7	8	7	0	33
女	10	7	6	7	1	31
計	21	14	14	14	1	64

親等との居住状況であるが,一貫して親と同居しているケース（親戚と同居も含む）は30人,離家経験のあるものは34人であった。離家の理由は，進学や結婚のためである他，住み込みの仕事に就いた場合など就労に関わるものや，親子関係不和による別居，児童自立支援施設への入所，生活困難者支援NPOへの入所等である。親および本人の生活保護受給の関係による別居も含まれている。

結婚歴のある者は10人（うち離婚 3 人）である。このうち女性 3 人は10代での妊娠を経験しており，未婚の場合も含まれる。本人が生活保護受給者であるケースは 4 件あり，すべて生活困難者支援NPO利用者であり，支援を受けながら，生活を立て直すための一つの手段として生活保護を受給している。

2　進学・就労面からのケース分析

以下ではより詳細に64ケースの分析を行う。若者といっても年齢は10代後半から30代前半まで幅があり，高校中退後の教育歴や家庭環境，雇用形態なども異なる。ここではいくつかの要素からケースの分類，整理を行い，高校中退の軌跡のタイプとそれが生み出される背景や要因について考察する。

上で本調査の64ケースの属性等を概観したが，高校中退を経験したといっても，進路や就労状況,家庭環境などは様々であった。ここではいくつかの要素を組み合わせて,より詳細にケースの整理分析をしてみたい。高校中退のプロセスを重視する本稿の観点からは，中退後の本人の学歴や雇用，生活状況の推移に注目する必要がある。そこで，ここでは主に進学・就労（学歴と雇用状況）の面から整理し，それを中退前の家庭や学校などの状況と関連させて検討するという手順を採る。なお，１～２件しかない自営業・自由業と子育てについては検討の対象か

ら外すこととする。

（1）大卒・専門学校進学者

上で見たように，本人学歴は高校中退のまま（中卒）が最も多いが，それ以外の者も 4 割ほどいる。高校に再入学したり，高卒認定試験を受けるなどして，高卒資格を取り，さらには専門学校を卒業したり，大学に進学したりしている者も多い。では大学に進学したり，専門学校に進学，卒業したりした者はどのような若者たちなのか。

64ケースのうち，専門学校以上に進学したのは12人おり，専門学校在学中 2 人（男 1・女 1），専門学校卒業 3 人（女 3），大学在学中が 6 人（男 4 ・女 2），大学中退 1 人（女 1）という内訳となっている。これらの中退後の進路を見ると，中退後，働くことはせず，一定の期間をはさんだ後に通信制高校か定時制高校に再入学・編入して高卒資格を取っている。家庭の経済状況は，「やや厳しい」も 1 件あるが（他に不明 1），他は「比較的安定」・「ゆとり有り」である。母子家庭が 4 件あるが，他は両親がともにいる。親の学歴では，高校中退・中卒はなく，いずれも高卒以上であり，両親のどちらかが専門学校卒・短大卒・大卒であるケースは 8 件ある。父親の職業は不明を除くと，会社員が 6 件，医療専門職 1 件，公務員 1 件，宗教団体 1 件である。高校中退経験者のうち，専門学校・大学に進学した者の親の学歴は高校以上で，専門学校卒・短大卒・大学卒も多い。父親の職業は会社員，専門職，公務員などの安定した職に就いている場合が多く，家庭の経済状況も安定している。

このケースの高校中退理由を見ると，友人関係・教師との関係のトラブル・不信感の発生，入学した高校の雰囲気になじめなかったこと，中学時代からの不登校，精神的な面の不調などが直接的な理由であり，一部，遊びによる学業不振や喫煙による処分もあるが（20番・21番・67番），いずれにしても学校生活・学業関連の要因によって中退に至っている。経済的な困難によって中退したというケースはない。

就労状況を見ると（在学中は除く），専門学校卒 3 人は正規雇用，自由業（音楽関係），アルバイトとなっている。このうちアルバイトは心身の不調により，通常就労が難しいという事情があるが,他の 2 件は専門学校の教育を活かした就職により正規雇用や希望の道に進んでいる。大学中退のケース 1 件は，推薦で入学した大学の勉強についていけないことと自分のやりたい仕事・活動が見つかったことが理由で大学を中退しているが，調査時点では自分の希望の職業に向けてトレーニングを受けている状況にあった。

このように高校中退後，高校再入学や高認取得により高卒資格を取得し，専門学校・大学に進学した者は，家庭環境が比較的安定しており，両親の学歴も高い傾向にある。生活費を稼ぐための長時間アルバイトに追われるようなこともなく，勉学や将来の希望の仕事のための準備に時間を費やすことができている。中退理由も経済的な問題はなく，学校内での生徒・教師とのトラブルや不信感等によるものであることが特徴的である。

（2）高卒学歴者

高校に再入学・編入して卒業した者および高認により高卒資格を取得し，調査時点で学歴が高卒となっている者が 9 人（男 3 ・女 4）いる。このうち，高認取得者は 3 名（男 1 ・女 2）である。高校に再入学した者は，本人あるいは親が別の高校を探したり，高校教員が定時制高校等を紹介したりすることで高校に再入学している。また高認取得者の場合，高校再入学はで

きないが，フリースクール高等部や専門予備校に通いながら高認を受験したケース３件（５番・６番・11番）と介護職正規雇用となった後に高認を受験したケース１件がある。

高卒学歴９人のうち，４ケースが母子家庭である。親の学歴を見ると，高校再入学・卒業者６人の場合は大卒や専門学校卒が多く，高卒が１件で，中卒はいない。これに対して，高認取得者３人の場合，親の学歴は両親とも中卒２ケース，高卒１件（父不在）である。家庭の経済状態が安定しているのは２人のみであり（16番・52番），他は厳しい。高認取得者は３人とも家庭の経済状態が厳しい（５番・６番・49番）。

高校再入学・卒業者の中退理由の大半は，直接には学校での友人関係のトラブルや教員との対立，学校外での校友による学校離れなどであり，学校のあり方や友人関係の問題から中退している。ただし，１人（５番）は家計を補うことを直接的な理由として高校を中退している。

高卒学歴者のうち，３人が正規雇用に就いている。２人は高校での就職支援が有効だったケースである（もう１人は介護正規職に就いてから高認取得）。他方，無職となっている者２人は心身の不調が関わっている。

このように高卒学歴者の就労・生活状況は多様であるが，正規雇用に就いているケースがあり，その場合は家族の支援を受けながら高校を卒業し，高校を媒介として正規職を見つけている。他方，高認取得者は家計が厳しいことが制約となって，高校再入学は困難であるため，次の進路に必要な高卒資格は高認で取得しているケースが多い。全体に家計にゆとりがない場合，高卒資格取得後に専門学校や大学に進学することは難しい。高認取得者の１人（５番）は専門職をめざして専門職養成予備校に通うが，学費が非常に高いため，インタビューではこの道を進むことは非常に難しいと述べていた。

（３）高校中退学歴者

高校中退後，高校への再入学・編入や高認取得をせず，学歴としては高校中退のままの者が39人（男20・女19）いる（表５）。この39人の調査時における就労・生活の状況を見たものが表９である。高校中退学歴者39人のうち，何らかの形で働いている者は31人である。そのうち，正規雇用に就いている者は３人のみで，非正規雇用に就いている者（アルバイト等をしてきたが，調査時は職が無く，求職中にある者を含む）が25名いる。他は家事手伝い，子育て，無職である。

表９　調査時における高校中退学歴者の状況

	正規雇用	非正規雇用（求職中含む）	自営業	家業手伝い＋非正規雇用	家事手伝い	子育て	無職	計
男	3	13	0	0	0	0	4	20
女	0	12	1	2	1	2	1	19
計	3	25	1	2	1	2	5	39

注）表１の47番は飲食店経営に参画しており，正社員であるが，アルバイトもしているので，非正規雇用に分類した。

①正規雇用

正規雇用３人はすべて男性である。19番は高校入学前より高校教育や学歴に意味がないとい

う考えをもっており，私立高校に入学したものの，勉強に身が入らず，単位不足が生じたことを機会に１年生で中退した。中退後はすぐアルバイトを始め，その後複数の非正規雇用に就いたが，先が見えないため退職し，19歳で住宅関連会社に正社員で採用された。ここは学歴不問の会社であり，この仕事で成績を上げ，店長にもなって相応の収入を得ている。父親は専門学校卒で会社員，母親は高卒でパートをし，家庭の経済状態は安定している。

54番は父親の経営する建設会社の正社員である。高校入学後に父親から自分の経営する会社でアルバイトをしており，単位不足から１年生で中退した。中退後も同じアルバイトとして働き，３年目に正社員となった。その後，職業訓練校にも通い，技能士資格も取得している。

64番は，中学生時代から勉強嫌いで，高校２年生進級直後に自ら中退した。その後，一時は高校に戻りたいとも考えたが，行動に移すことにはならず，飲食店でアルバイトを続け，正社員となった。家庭は離婚により父不在であるが，連絡が取れる関係であり，経済面では比較的安定している。

正規雇用に就いている者はいずれも中退後，アルバイトを始め，３～４年続けた後に正規雇用を見つけている。これらには一定の安定した家庭があり，それが基盤となって本人の生活を支え，正規雇用に就くことができたと言える。

②非正規雇用

非正規雇用に就いている者は25人（男13・女12）である。

このグループの親の状況を見ると，25人のうち一人親家庭が11人，両親とも不在が２人であり，両親ともいるのは半数ほどである。一人親家庭のうち，経済状態が安定的であるのは２人だけでそれ以外は厳しい状況である。親の学歴は，両親のいずれかあるいは両方が専門学校卒か大学卒のケースは３人のみで，両親のいずれかあるいは両方が中卒・高校中退であるのは12人である（両親とも学歴不明４人，両親とも高卒３人）。ただ，家庭の経済状態や親の学歴等の違いによって，子どもの中退状況等に明確な差異は見られない。

このグループを全体として見ると，まず学校での勉強に意味が見いだせず，勉強嫌いでほとんど勉強をしないまま，小学校の途中や中学校で勉強に付いていけない状態になっている者が非常に多い。中学校段階までに不登校になっているケースも多い。不登校は大きく見て２つの傾向がある。１つは，家族関係や学校でのいじめ，教員との対立などで不登校になるケースである（39番・40番・44番）。もう１つは，家に閉じこもらず，同じ学校あるいは他校の生徒たちと家やゲームセンター，スーパー，繁華街などに集まって遊んだり，グループ間の喧嘩や無免許バイク運転，喫煙，飲酒そのほかの非行に走るケースである（17番・18番・31番・63番など）。

中学時に勉強に向かわなくなっており，高校に行って勉強しようという気持ちはなくなっているが，中学校教員や家族から進学を勧められてやむをえず受験しているケースが非常に多い。そのため高校入学後も勉強に意味を見出せず，友人関係や教員との関係が良好な場合は登校が続くが，それが途切れたり，対立が生じたりすると退学に進む。また中学時代から勉強よりも関心は学校外の遊びに向かっており，友人とのグループで行動しながら喧嘩等や非行に及ぶ場合もある（12番・33番・34番・35番・62番・63番）。遊びや非行には向かわないが，学校の勉強よりもバイトに多くの時間を割くケースもある（17番・18番・24番）。欠席が増加していくと単位が不足し，進級が困難になるため退学を決断するに至るか，何らかの非行や事件による

停学から退学に至る場合が多い。そもそも高校の勉強に意味を見出していないこれらのケースでは，高校中退後の道として高校への復帰は選択肢になりにくい。そこで建設･建築業，運送･倉庫業，飲食・娯楽・風俗業，旅館住み込みなど，10代で高卒資格がなくてもできる仕事にアルバイトとして就くことからスタートしていくこととなる。

非正規雇用グループの一部には，家庭の経済的困難や親の病気から，働く必要に迫られて高校を退学した者もいる。その場合には先に見た正規雇用の場合には，安定した家庭基盤のもとで正規雇用を探すことができたケースがあったが,不安定な家庭環境が場合にはそれが難しい。なお，旭川市や釧路市の高校中退者の場合，高校が郡部に多くあり，長時間の通学を強いられるため通学の時間的，金銭的な負担が重い場合も中退理由になっている。

（4）無職者

本調査の対象者64人のうち,調査時点で無職であった者が 7 人いる（男 5 ･女 2)。このうち，高校中退後，別の高校に転入して卒業し，高卒学歴となっている者は 2 人で，他はみな高校中退学歴である。年齢別では10代 3 人，20代 3 人，30代 1 人である。本調査の無職者は，病気や障害で調査時には仕事に就くことが難しい状況にある者が多い。

10代のうちの 2 人は病気を発症し，高校中退後，療養しながら次の道を探しているところである。 1 番は中学時代に病気を発症し，高校入学後も再発して入院した。退院後，学校から自主退学を求められて退学し，別の高校に転入しようとしたが，どこも病気を理由に断られた。その後，小規模作業所やフリースペースを利用しながら，単発のアルバイトなどして次の進路を考えているところである。51番も中学時代から心身が不調になり，高校でもそれが発症して単位不足で退学に至った。中退後は，体力を回復させるために生活困窮者支援NPOのボランティア活動に参加している。調査時には体調が回復してきたので，アルバイトを探そうとしていた。

20代のうちの 2 人は障害をもっている。52番は経済的に安定した家庭で過ごしたが，入学した高校の雰囲気が合わなかったため保健室登校となり，出席日数の問題から中退して公立定時制高校に転入した。卒業後，いくつか仕事を経験して結婚・出産したが，病気を発症し，離婚した。現在は子どもは預けて，生活困難者支援NPOの支援のもと，生活保護を受けて暮らしている。また55番は子どもの頃から虐待を受けていた。中学時代には喧嘩，喫煙，飲酒などをし，怠学傾向があった。高校入学後も喧嘩などの問題を起こし，成績の問題から単位不足で留年となったため退学した。中退後，アルバイトはしたが，トラブルを起こし，家庭でも不和が生じたために家を出て，NPO施設に入居した。現在は生活保護をもらいながら，仕事を探そうとしているところである。

10代の 1 人（60番）は父子家庭で，調査時には父は生活保護を受けていた。彼女が進学する高校を選んだが，彼女と破局して高校を中退した。父から一人暮らしを求められて家を出たものの，働き口が見つからず，児童相談所や児童自立支援施設で過ごし，生活困難者支援NPO施設に入所して生活保護を受けながら仕事を探している。20代の 1 人（58番）は経済的に安定した家庭で過ごしたが，高校入学時に家計が傾き，両親は離婚した。高校では友人ができず，欠席がちになって退学したが，その後，公立定時制高校に再入学し，卒業した。ただ，母が生活保護を受けたままで就職先を見つけることが難しく，生活困難者支援NPOの支援で世帯分離を図り，同時に研修やボランティア活動をしながら次の道を考えているところである。

30代の１人（７番）は経済的に安定した家庭で育ったが，中３からいじめで不登校になった。高校進学したが，同級生となじめず，高１の２学期に退学した。中退後，いくつかアルバイトをし，その後，ショップのカウンター担当を10年近く勤めた。しかし，閉店となり，ネット販売担当に移ったが，うまくいかず，退職した。これが自信喪失となり，父の仕事もなくなって家計が厳しくなったことから焦りも生じて，アルバイトの面接さえ受けられない精神状態となった。現在は地域若者サポートステーションでキャリアカウンセリングなどを受けている。

このように本調査の無職者は，病気や障害があり，就労と生活の道を探っているケース，困窮家庭からの自立の困難に突き当たったケース，失業による自信喪失のケースがある。

3　小括

以上，進学・就労面からのケース分析を行ってきた。高校中退経験者と言っても，その家庭環境や中退の経緯，中退後の進路・生活は一様ではない。

高校中退後，一定割合の者が再度高校に入学，卒業し，あるいは高認を取得して専門学校や大学に進学している。このグループは家庭環境が安定しており，経済的理由で中退した者はいない。学校での友人関係・教師関係や学校のそれを基盤として一定のゆとりをもって自分の進路を模索することができ，また就労については正規雇用や専門的な道に進むことができている。

高卒学歴者では，全体的には家庭の経済的状態は厳しい方が多いが，それでも親の学歴は専門学校卒・大学卒が多く，そうした家庭の場合には高校に再入学して卒業し，正規雇用にも就くことができている。これに対して，より経済的に厳しい場合，高認で高卒資格を取得している。このように高卒学歴者は二層に分かれていると見ることができる。

高校中退学歴者の場合，全体に高校教育に意味を見出せないままに進学した者が大半である。エネルギーは高校の勉強よりも遊びや喧嘩，非行，友人関係に向かい，単位不足か停学等を契機に退学していく者が多い。ただ，これも二層に分かれる。一方では，一定の安定した家庭を支えとして，中退後の一定期間，アルバイト等をして仕事を模索した後に学歴不問の職業で正規雇用に就いている者がいる。他方で非正規雇用の場合，一人親家庭や経済的に厳しい家庭が多く，高校再入学は困難であり，高認取得の準備もままならないままに，学歴不問のアルバイトに就いていく。

高校中退学歴者の場合，短期的な雇用が多いため，中断が入りやすい。本調査でも調査時に働いておらず，求職活動をしていない者がいたが，ハローワークに行くなどの求職活動をしていなくても職を探していないとはいえない。ここで見たケースでは，一時的な中断を挟みつつもみな働き続けてきていると言える。

ここでの無職者は病気や障害があったり，アルバイト等をしてきたものの極度の生活困窮に陥っているケース，また失業した後の職探しと生活の見通しに関して大きなストレスがかかったケースである。仕事に就こうとしながらそれに進むことができない状態にある者であり，職に就こうとしない者ではない。

高校中退経験者64ケースを，高校中退を中心においたプロセスとして捉えてみると，大きくは４つの軌跡として整理でき，さらにそのうちの２つにも区分が見られた。もちろんケースはすべて異なっており，千差万別と言えばその通りであるが，進学・就労という面から把握を試みれば，高校中退経験者の移行過程はこのような分岐が存在していると言える。次節では，本節の整理を踏まえつつ，当事者の高校中退認識・評価も加えてさらに検討を加える。

Ⅳ　グルーピングによる分析――家庭の条件と中退後の状況

1　グルーピングの目的と方法

64件のケースは，高校中退に至るまでの背景•プロセスから中退後の進路や生活の状況まで，それぞれが多様であるため中退という言葉だけで一括りにすることはできない。しかし，個々のケースでは家庭の状況による影響が強くみられることから，本節では家庭の条件を基準にいくつかのグループに分類して分析を行う。グルーピングによる分析で特徴を明確にすることによって中退の背景と中退後の進路形成において影響を与える様々な要因を探ることで，現代日本における高校中退に関する問題を移行過程の諸相から考察する。

調査の過程で明らかになった家庭環境と中退後の進路の関係を分析するために，主に経済的な基盤を中心とした「家庭の条件」と，インタビュー時点での生活•就労などの「現在の状況」によって分類をした。個々に複雑なケースをグルーピングするにあたって，家庭環境や現在の状況を客観的な指標に基づいて明確に分類することは不可能であるため，インタビューによって確認することができた情報をもとに「家庭の条件」と「現在の状況」をそれぞれ「不安定」•「中程度（どちらとも言えない）」•「安定的」の 3 段階に分類した。

「家庭の条件」については，中退時点における経済的な状況に加えて家族から支援が受けられる家庭環境であったかどうかを踏まえて「不安定」「中程度」「安定的」に分類した。なお，経済的な状況のみを示した表 1 の「家計状況」とは異なる分類となっている。経済状況の評価については，本人による暮らし向きの評価は「普通」であると感じている場合が多く，そうした主観に基づいて語られるため，中退経験者によるインタビュー調査では家計の状況を正確に把握することは難しい。そのため，本人による暮らし向きの評価の他に，中退理由に経済的な問題が関係していたか，生活保護の受給経験，ひとり親の就労状況，保護者の病気，失業などの状況を踏まえて判断した。また，経済的な状況が比較的安定していても，家庭に何らかの問題を抱えていると高校中退に直面した際に家庭から支援を受けることが困難であるため，経済的な状況に加えて，離婚・再婚，親との死別などの家庭環境の大きな変化，虐待の傾向，親子関係の不仲，中退時点の相談の有無など，中退に至るまでの家庭環境を踏まえて「家庭の条件」を分類した。その結果，「家庭の条件」は，「不安定」32ケース，「中程度」18ケース，「安定的」14ケースに分類した。なお，「不安定」に分類したケースには，高校中退の直接的な要因になるほど困窮しているケースや経済状況は比較的安定していながら親子関係の不仲により中退と同時に家に出なければならなくなったケースなど，その状況や程度にはかなりの幅がある。例えば，複合的な要因を抱え家庭が「かなり厳しい」状況にある21ケースと，何らかの困難を抱え「やや厳しい」状況にある11ケースを更に分類することも可能であるが，グルーピングにあたっては全体的な特徴を明らかにする目的から「不安定」32ケースとして扱った。

次に，「現在の状況」については，インタビュー時点を基準として就労（在学）状況，現在の困難や将来への不安の有無をもとに「不安定」「安定的」「どちらともいえない」に分類した。基本的な判断基準としては，正規雇用など安定した就労状況にあるケースや大学・専門学校に在学中のケースは「安定的」，無職や非正規雇用で転職回数が多いケースは「不安定」，アルバイト・パートなど非正規雇用で転職回数が少なく現在の職で継続的に就労しているケースや高校在学中のケースは「どちらともいえない」とした。ただし，就労・在学の状況だけでは現在の状況を表しているとは言えないことから，現在の生活状況等を踏まえて分類を行った。その

結果,「不安定」22ケース,「どちらともいえない」25ケース,「安定的」17ケースに分類した。

以上の分類をもとに,「家庭の条件」と「現在の状況」の関係からグループ分けを行った（表10)。全体的な傾向としては，中退時点での「家庭の条件」が「安定的」であると中退後に学び直しの機会を得ていたり，安定した就労状況にあるケース（グループA）が多く,「家庭の条件」が「不安定」であると中退後に不安定な職を転々としていたり，無職の期間が長く続くなど不安定なケース（グループB）が多くみられ,「家庭の条件」と「現在の状況」には一定の相関的な関係を読み取ることができる。

一方で,「家庭の条件」が必ずしも恵まれた状態でなくとも「現在の状況」としては「安定的」であるケース（グループC）も少なからず存在している。また,「現在の状況」として「どちらともいえない」ケースは，高校在学中であったり，不安定な就労形態ながら比較的継続して働いていたりしているケースが多いが，今後の進路形成や生活の見通しには差異も見られる。この点については,「家庭の条件」が「不安定」なケース（グループD）と「安定的」なケース（グループE）の特徴から考察する。

表10　家庭環境と中退後の状況

		家庭の条件		
		不安定	中程度	安定的
現在の状況	安定的	2，10，47，49 グループC	8，11，27，30，61，64 グループC	9，13，19，20，21，32，54 グループA
	どちらともいえない	3，4，5，6，24，25，26，33，44，46，57，63 グループD	28，41，43，45，62，67	16，22，23，34，48，50，66 グループE
	不安定	7，14，15，17，18，31，37，39，40，51，55，56，58，59，60，65 グループB	1，12，35，36，38，52	

2　グループ毎の特徴

（1）グループA（7件，ケース番号：9，13，19，20，21，32，54）

経済的基盤を中心とした家庭の条件が整っており，中退後の進路・生活の状況も比較的安定しているグループである。現在の状況は，4件が大学在学中，2件が正規雇用，残りの1件は，音楽の専門学校を卒業した後，フリーランスで活動している。このグループでは，高校（高卒認定）での学び直しに加えて中等後教育機関へ進学している者が多い。正規雇用の2人は高校中退学歴のまま就労しているが，不動産賃貸業の営業職と父親が営む建設会社の社員であり，比較的学歴が問われない職に就いている。

また，多くのケースで家族からの支援が中退後の進路形成に大きな影響を与えていた。家族からの支援は進学する際の経済的な負担だけでなく，本人が学び直したいと前向きに思うことができるように，家族が良き理解者となり，家庭が安心して過ごすことができる場所となっていた。具体的には中学校での不登校段階から母親の積極的な支援でフリースクールに通い，高校で登校できなくなった際にも気持ちが落ち着くまで数ヶ月自宅で過ごしてから他の学校に通い直す事を勧めていたケース（9番）のように親が子どもの気持ちを尊重しながら学び直しに向けたアドバイスをする場合もあれば，直接的な支援はなくとも安定した生活基盤に背景にして，数年間の不安定な就労を経て正規雇用の職に就くまで本人の意思を尊重しながら生活を支えていたケース（19番）もあった。グループAのケースでは，中退前後の不安定な状態を精神的に支えつつ，本人の意思が明確になってからはそれを尊重して，必要があれば経済的にも支援を行なっている様子がうかがわれた。

さらに，家族以外の人間関係に関しても比較的豊かであるケースが多い。中退した高校の先生から通信制高校などの情報を教わったケース（20番・21番），高卒認定試験のために通った塾の先生から多くの情報を得て大学へ進学したケース（13番），「不登校を考える会」が支えになって将来への展望を切り開いていったケース（32番），友人ネットワークの中での近況報告や仕事を紹介が中退後の生活で重要な意味をもっていたケース（19番）など，家族以外にも信頼できる人の存在があったことがわかる。

また，このグループでは中退した高校の学力的位置は比較的高いケースが多く，主な中退理由として，中学校からの不登校が影響していたケース（9番・13番・32番），校風やクラスの雰囲気に馴染めず学校から離れていったケース（20番・21番），高校に通うことに意味を見出せなかったケース（19番），学校よりも仕事（父親の建設業の手伝い）を優先するようになったケース（54番）であり，学校・クラスに関する要因が多いことも特徴である。

グループAは，インタビューの時点において，比較的安定した状況にあるケースであるが，中退前後の生活において精神的にも経済的にも支えになる安定した家庭環境にあって，周囲のサポートを受けながら中退後の進路を形成していることがわかる。ただし，中退後の数年間の不安定な就労を経験した後に学校復帰したり，正規就労についたケース（21番・19番），大学に進学していても将来への不安を抱いているケース（13番）もあって，個々の状況としては必ずしも一貫して安定した生活を送ってきたとは言えず，中退後の経験において他のグループと同様に困難に直面している様子もみられた。

（2）グループB（16件，ケース番号：7，14，15，17，18，31，37，39，40，51，55，56，58，59，60，65）

家計状況が厳しいなど家庭の条件において恵まれておらず，中退後の生活ではアルバイトや無職などの不安定な状態が継続しているグループである。ほとんどのケースで何度も転職を繰り返しており，中退後に飲食店やスーパー・コンビニの従業員，建設関係の作業員，歓楽街での接客など学歴が必要とされないアルバイトによって収入を得ることができていても，将来に向けた進路の形成には繋がっていかない状況が多くみられた。就労経験が少ないケースとしては，妊娠・結婚を理由に高校を中退して夫の実家で子育てをしながらパートで働くも夫婦の収入は少なく将来に不安を抱えているケースがあった（14番）。また，不安定な就労の後，生活が破綻して住居を喪失して路上生活を経験していたケースもあった（37番・39番）。

グループBでは多数のケースで，安定した仕事に就くことを望みながらも求職活動での困難を経験しており，特に中退直後の若い時期や年齢を重ねた20代半ば以降において，アルバイトであっても仕事を見つけることに苦労する経験が多く語られていた（7番・15番・31番・39番・60番）。多くのケースで安定した就労のために高校や専門学校への進学を希望していたり，運転免許や調理師免許など職業に繋がる資格を取得したりしたいと考えていても，経済的な余裕がないために見通しが立たてられずにいる（15番・17番・18番・21番・31番）。また，本人や家族の病気や障害によって新たな進路形成が困難になっているケースも少なくない（7番・14番・19番・31番・51番・56番・58番）。

中退校の特徴としては，学力的に低位にあり中退者が多く出ている課題集中校に通っていたケースがほとんどであった。中退の主な要因は，バイトや遊びによる出席日数不足，問題行動，学業不振，経済的理由，男女関係・妊娠など多様であるが，学校経験において学業に励む意識が希薄であり，本人だけでなく家庭としても学歴や学校教育に対する期待や価値意識が低いケースが多いことも特徴的であった。

一方で，社会的支援によって別の高校に再入学をして生活を立て直そうとしているケースみられる（59番）。グループBには，高校再入学により高卒資格を得ても様々な要因によって不安定な生活が続いているケース（58番）もあるが，社会的な支援に繋がることで困難を抱えながらも生活を維持していた。

グループBでは，中退後の生活がとても不安定な状態にあることから，高校中退経験を否定的に捉えているケースが多くみられた。一方で，中退経験は悪い面もあれば良い面もあったと多義的に捉えているケース（17番・60番）もあり，現状についても必ずしも不安・不満などのマイナスイメージだけが語られるわけではなかった。ただし，将来展望や生活状況の改善に対する諦めの意識や短期的な希望しか持てない状況の中で語られる肯定的な自己解釈だと考えられるため，彼／彼女らが社会的な支援を必要としていないことを意味するものではない。

（3）グループC（10件，ケース番号：2，10，47，49，8，11，27，30，61，64）

家庭の条件がそれほど恵まれていないが，中退後の状況としては比較的安定しているグループである。高校や専門学校を卒業して正規雇用に就いているケース（2番・10番・11番・49番），高校を卒業して大学や専門学校に在学中のケース（8番・27番・30番），高校中退学歴で就労しているケース（47番・61番・64番）である。

中退に至るまでの学校経験としては，中退校は学力的に低位であるケースが多いが，学歴や

学校教育に対する価値意識はそれほど低くはない。特に，友人関係のトラブルによって中退したケース（2番・8番・10番・11番・27番）では，中退後も学びが継続されていた。一方で，学校に戻らずに就労の道に進んだケースでは，中退要因の多くは遊びや問題行動であったが，中退後の生活においても友人関係のネットワークが重要な役割を果たしていた。現在の就労状況をみても，友人関係を契機として働き始めたクラブやバーなどで職業キャリアを重ねている（47番・61番・64番）。

グループCの中で，家庭の条件としては恵まれてはいないにもかかわらず安定した現状が可能となった背景を分析すると社会関係資本の影響がみられた。ほとんどのケースで家族や周囲の人から高校再入学や高卒認定試験に関する助言や示唆を受けており，中退後に通い直した高校での丁寧な就職支援等によって正規雇用に就いたケース（2番•10番），周囲からの助言によって経済的に厳しい家計状況でも奨学金やアルバイトによって進学（11番）や資格の取得（49番）が実現されたケースがあった。また，生活・就労に影響を与える友人等の人的ネットワークが豊かであることもグループCに特徴的であった。

中退経験に対する自己解釈としては，大変なこともあったが中退して良かったと肯定的に捉えているものが多いが，特に，在学中のケースで現在の大学生活での悩みや卒業後の就職に関する不安が語られていて中退時の課題が継続している様子もみられた（8番・30番）。

（4）グループD（12件，ケース番号：3，4，5，6，24，25，26，33，44，46，57，63）

家庭の条件が不安定な中で，中退後の状況としては「中程度」にあるグループである。高校等に在学中であるケースと継続的にパートやアルバイトで働いているケースが含まれる。

このグループの特徴として，非正規の就労で生活はそれほど安定的ではないにもかかわらず現状に対する満足度は比較的高いことがあげられる。在学中のケースでは，二度の中退を経て，定時制高校へ再入学したケース（3番），長期間のアルバイト・無職を経て公立通信制高校へ再入学したケース（33番）など，困難な状況を経て学び直しを実現したことが現状への肯定的な評価になったと考えられる。また，中退後に様々なアルバイトを経験した後，介護の資格を取得してパートで働く20代後半の女性（24番・25番），学び直しでの良好な学校経験の後，結婚を見据えて正規就労を望まなかった20代前半の女性（4番・6番）のように，人生設計におけるジェンダーの影響もみられる。その他，現状のアルバイト生活に満足しており比較的長期間継続しているケースも多く，不安定と思われる就労状況であっても当人の自己意識においては必ずしも不満・不安を抱いているわけではなかった。しかしながら，非正規の就労であるため現在の生活が今後も続いていくとは限らず，本人の健康状態や景気などの社会状況の変化によっても短期間で困難な状況に置かれてしまう可能性も否定できない。

（5）グループE（7件，ケース番号：16，22，23，34，48，50，66）

比較的安定した家庭環境にありながら中退後の進路•生活の状況が不安定なグループである。グループEは「家庭の条件」と「現在の状況」の相関関係には当てはまらないケースであるが，それには次のような要因が考えられる。

要因の1つは，何らかの理由によって家庭からの支援が得られなかった場合である。親子関係の不仲のほかに，特に年齢を重ねたケースにおいてアルバイトなどの不安定な状況が長期化したことで家族による進路支援を受けにくい状態になっていた（16番・34番・50番）。また，

健康上の問題によって就労が継続できない場合がある。あるケースでは家庭の支援があって，専門学校を卒業するも就職活動の時期に体調を崩したことで精神的な不安から就労が定着しない状況が継続していた（48番）。その他に，中退してからの期間が短く今後の進路が不透明な場合がある（22番・23番）。

グループEのように，家庭環境が恵まれている場合であっても中退後に順調な進路をたどるとは限らず，安定的な進路を切り開くためには人的なネットワークや社会的支援の存在が重要な役割を果たしていることがわかる。

（6）小括

高校中退経験者の移行過程において経済的な状態を中心とした家庭環境が進路形成に大きな影響を与えており，「家庭の条件」と「現在の状況」には一定の相関が見られた。特に高校中退経験者の多くが経済的に困難な家庭環境で育っており，中退後の生活においても不安定な状態にいることが改めて確認された。一方，安定した家庭環境であっても高校中退に至るケースは少なくないが，そうしたケースの多くは，学び直しによる学校経験の回復や友人関係などの人的ネットワークによる就労機会の獲得によって，中退後における安定した進路を形成していた。つまり，安定した家庭の影響としては，学費負担などの経済的要因にとどまらず，中退直後の不安定な精神状態を支える居場所であったり，家族から新たな進路に向けた助言や支援が提供されたり，社会的な支援に繋がりやすいなど様々な面で影響が見られた。こうした点から，経済的な面だけでなく文化的・社会的な面においても家庭がしっかりと基盤を形成していることで，本人が主体的に進路を切り拓いていくことが可能となっている様子が明らかになった。

他方で，恵まれた家庭環境であっても何らかの要因によって支援が得られず不安定な状況に置かれているケースがあったり，家庭の条件としては恵まれていない環境であっても身近な人からのアドバイスや友人などの人的なネットワークによって新たな進路が形成されているケースもみられた。これらのケースは，以上のような「家庭の条件」と「現在の状況」の相関的な関係性を否定するものであると言うよりも，高校中退に対する支援が家庭などの個人的資源に依存しており，学校や社会における支援体制が整っていないことの表れであると考えられる。

3　個別ケースからの検討

それぞれのグループに特徴的なケースを取り上げ，中退に至るプロセスやその後の生活・進路の様子を具体的に見ていく。個別ケースの検討を通して高校中退の経験者が，どのような困難を抱えているのか，どのような支援を受けて新たな進路を切り開いているのか，その一端を明らかにする。

（1）グループA：ケース番号21　Sさん（20歳・女性・大学生）

①家族構成：父（会社員），母（パート），妹とSさんの4人家族で，経済的には安定しているが父親は転勤が多く単身赴任の期間が長い。両親は共に教育熱心で，幼いころから高校・大学に進学するよう勧められていたので，Sさんも「勉強するのが当たり前」だと思っていた。

②高校中退まで：中学校では成績優秀で学習意欲も高く，友人や教師との関係も良好だった。高校入試の際は，大学への進学を考えて進学校であるK高校に入学した。入学する前のK高校のイメージは，「とりあえずダサくて，でも進学校」という印象で，仲の良い友人に同じ高校

に進学した人はいなかった。入学後は制服や髪型などの生活指導が想像以上に厳しく，それに馴染んでいるように見えた周囲の生徒は自分とは気が合わないと感じた。後になって考えると，「この学校はつまらないという偏見」や「私は違うといった変なプライド」があったため，積極的に友達を作ることをしなかったのだろうと感じている。

Sさんは，進学した高校で孤立感を深める一方で，中学時代の友人関係に居場所を見出していった。友人には高校に進学しなかった人も多く，アルバイトや水商売で生活する友人もいたので高校で勉強することに対して疑問を感じるようになっていった。次第に高校を遅刻したり欠席したりすることが多くなって，生活態度や友人関係などで両親との喧嘩が絶えなくなった。高校に通うことに意義を見出せないまま学校の全てが嫌になり，最後は担任からの「もう，気持ちは決まっているんだろ」という言葉に後押しされて中退を決意した。一方で，高校の先生たちは後々のためにと追試やレポートで１年生の単位を取得させてくれた。

③中退後の状況：中退直後は，学校から自由になった解放感の一方で将来への不安や戸惑いも大きかった。具体的な見通しは持てなかったが，お金がないと何もできないと思いアルバイトをはじめ，２年間のフリーター生活を過ごした。その間，中退時に教員に勧められた通信制高校に入学するが，提出書類の出し忘れがきっかけとなり再び退学している。２度目の退学からおよそ１年後，同じ中学校の友人が高卒認定試験を受けて大学に進学したことを知って，「高校に行かなくても大学に行けるんだ」と思い，友人が通っていた学習塾を紹介してもらった。

アルバイトで貯めていたお金で学習塾に通い，塾の先生から様々なアドバイスをもらいながら高卒認定試験を受けて大学に進学する。大学進学後は一人暮らしをしているが，学費と家賃は家庭が負担し，生活費は奨学金とアルバイトでまかなっている。今の大学生活は，好きな勉強ができて，とても楽しいと感じている。

④中退の自己解釈と本ケースの特徴：Ｓさんは中退経験を振り返って，「中退後はとにかく一生懸命でいろいろな経験ができた」，「無理して高校に行くより，一旦休んでみて良かった」と肯定的に解釈している一方で，「親に迷惑をかけてしまった」，「中退しなければもっと良い大学に行けた」といった後悔の気持ちも示している。また，親子関係については，中退以前は両親からの一方的な期待とそれに対する反発が強く親子関係は悪かったが，中退後はＳさんの意思を尊重しながら生活•進学を支えており，中退を契機に親子関係が良い方向に変化している。

本ケースでは，高校中退後の進路形成において転機となったのは，友人から高卒認定試験・大学入試のための学習塾を紹介してもらったことであった。教師や両親から様々な進路の情報や支援を得る一方で高卒認定試験に関する情報は届いていなかったが，同じように中退を経験した友人が高卒認定試験を受けて大学に進学したという事実がＳさんの大学進学という進路希望を実現していく上で現実的な道筋を示すものとなった。中退経験者の進路形成においては，Ｓさんのように，偶然的な出会いの中で，将来へ向けた漠然とした希望が具体的な進路展望へと繋がっていくケースは少なくない。

（２）グループB：ケース番号31　Ｊさん（19歳・男性・アルバイト）

①家族構成：母（無職）と二人暮らし。父親はＪさんが２歳の時に離婚してから会ったことがない。母親は夜の仕事で家計を支えていたが，現在は精神的な疾患によって働くことができない。家庭は経済的に厳しく，母親は自己破産の経験もある。

②高校中退まで：小学校の頃からいじめを受けていた。仲の良い友達もいたが，いじめに遭う

のが嫌で学校が楽しくないと感じることもあった。小学校・中学校ともに不登校は経験していない。勉強が苦手で，中学１年の頃から学校の授業についていけないことを自覚するようになった。高校進学の際には，学力的な理由から一番入りやすいだろうということで私立Ｙ高校に入学した。

高校生活では，すぐに友達ができて，先生方も良くしてくれたので毎日とても楽しく過ごした。授業も中学校までの復習からわかりやすく教えてくれたのでとても嬉しかった。Ｙ高校での生活は大好きだったので一度も欠席することはなかった。

入学後はスーパーのアルバイトで家計を助けたが，私立高校なので学費を負担する母親の苦労が気になっていた。家計を支えるために高校を辞めることも考えたが，母親はＪさんを高校に行かせたいと考えていたので「気にしなくていい」と言われた。しかし，数か月後には，無理がたたって母親が体調を崩してしまい働くことができなくなった。そのため，Ｊさんは高校を辞めることを決意し，母親と担任を説得する形で中退に至った。

③中退後の状況：中退後しばらくはスーパーのアルバイトを続けたが，家計を支えるために時給が高い仕事を探して居酒屋でのアルバイトに転職をする。幼少期から料理が好きだったので将来は調理の仕事がしたいと思っていたが，居酒屋での仕事は労働条件や職場環境が非常に悪かった。忙しい時には18歳未満にも関わらず法定労働時間を超えた残業を強いられながら，その分の賃金は支払われなかった。一方，客足が減るとシフトの時間が短くなるため，収入が減ってしまうという状態であったため，不安定な収入を補うために短期のアルバイトをはじめた。その後もアルバイトをいくつも転々としてきた。

現在は酒屋で配送のアルバイトをしている。ハローワークにも行ったが自分に合う仕事は見つからなかった。仕事の幅を広げるため自動車の免許を取りたいと考えているが費用が工面できず，母親が自己破産をした経験があるためローンを組むこともできない。

④中退の自己解釈と本ケースの特徴：Jさんは中退経験を振り返って，「高校生活でしかできないことが経験できなかった」と感じており，友人からの高校中退の相談を受けた際にも「辞めても何も良いことはない」とアドバイスすると話しており，中退はマイナスの経験だと考えている。一方で，中退したことで「誰よりも早く社会に出て経験を積むことができた」，「社会で生き抜く面では誰にも負けたくない」と語っており，家庭の経済的事情によって不安定な生活を歩まざるを得なかった事実と向き合って，自分の力で何とか状況を打開していきたいと考えているようである。

しかし，中退後の状況において，Jさんは調理の仕事をしたいという明確な希望はあるが，家庭の事情もあって具体的な展望が描くことができずにいる。専門学校に通うことは経済的に難しいため調理のアルバイトで経験を積みたいと考えていたが，居酒屋での劣悪な労働を経験したこともあって，現在は毎月の収入を確保することを優先せざる得ない状況が続いている。

（３）グループC：ケース番号10　Kさん（20歳・女性・介護職）

①家族構成：母（飲食業）と妹とＫさんの３人で暮らしてきた。両親はKさんが５歳の時に離婚し，母親の実家があるS市に引っ越してきた。母親は夜間の仕事だったがＫさんの高校中退を機に昼間の仕事に転職している。現在は，Sさんの収入で家計にゆとりが生じたこともあって，１年前にお惣菜を販売するお店を開いた。

②高校中退まで：勉強は苦手だったので面接だけで受験できる定時制M高校に入学する。昼間

にアルバイトをして家計を助けるつもりだったので，母親もM高校への入学には賛成していた。実際に，入学と同時にコンビニのアルバイトをはじめ，朝から夕方まで働いた後で登校していた。

学校の雰囲気としては，素行の悪い生徒が多かったが，高校生活はそれなりに楽しく，生徒会の副会長も務めた。しかし，周りに流されるように学校をサボったり，万引きを繰り返したりとKさん自身も素行が悪くなっていった。そうしたKさんの変化に母親が気付き，高校を辞めたほうがいいのではないかと促された。その後，アルバイトをしながら自宅で今後のことを考え，「このままじゃダメだ，ちゃんとしなくちゃ」と自主退学を決意した（高校２年・春）。

③中退後の状況：中退直後は「ついにやめてしまった」とさみしい気持ちになったが，「高校を卒業しないと仕事なんかない」と思って，母親に勧められた昼間定時制Ｓ高校への編入を目指し，アルバイトをしながら約１年間勉強に励んだ。受験勉強とあわせて，少しでも卒業に必要な単位を埋めるため高卒認定試験も受けた。この時期に，母親の勧めでホームヘルパーの資格も取得している。

また，Ｋさんが中退したことで母親は子育てが疎かになっていたと反省し，昼間の仕事に転職をしている。母親は，家計が厳しい中で経済的にも精神的にもＫさんを支えていた。また，Ｋさんは，Ｓ高校へ編入した後も家計を助けるために夕方からアルバイトをしており，Ｓ高校での生活は，「本来の自分が出せて，ものすごく楽しかった」と振り返る。

現在は，正社員として介護の仕事をしている。高校の職業体験で訪問した介護施設に興味を持ち，その後も，ボランティアで通い続け，Ｋさんが施設に直接打診して卒業後の就職を決めた。

④中退の自己解釈と本ケースの特徴：Ｋさんは，中退経験に対して，「いい学校に出会えて良かったし，中退したことで強くなった」と感じているが，肯定的に捉えられるようになったのは「職場の上司などの暖かい言葉によって自信を持てるようになった」からだと話している。一方で，「履歴書に書くのがすごく嫌だった。中退した他の人が自分のように良い環境に巡り会えたか，心配というか複雑な気持ち」と語るように中退に対するネガティブな社会的評価を実感している。

本ケースでは，母親から提供された編入学や資格取得などの助言や支援が次のステップに移行する際に重要な機能を果たしており，家庭を基盤に学校や社会と繋がり新たな進路を形成していた。

（４）小括

グループＡ・Ｂ・Ｃから３ケースを取り上げたが，高校中退後のある時点においては同じように「アルバイト」であっても，進路形成のプロセス（経路）を詳しく見ていくと大きな差異が存在していることがわかる。そうした差異の中で最も特徴的な点は，家庭背景が中退後の進路形成に大きな影響を及ぼしていることである。安定した家庭環境であるグループAの事例では，家庭での安定した生活によって次の進路への模索が可能となり，家庭からの経済的な支援もあって大学進学を果たしていた。一方で，家庭の条件が恵まれていないグループBの事例では，家計を補うために中退を決断してアルバイトをするが，不安定な生活が続き，就労でも困難を感じていた。また，グループCの事例では，家計を助けるためにアルバイトをしていたが，中退後の進路形成の場面では母親からの積極的な支援によって新たな進路を切り拓くことが可

能となっていた。

第2の特徴として，中退後の生活における社会的な関係が進路形成に「転機」をもたらしていた。グループAの事例では，中退後に大学進学した友人の存在と高卒認定試験や大学入試のために通った学習塾が転機となっていた。グループCの事例では，ホームヘルパーの資格取得や通い直した高校での就職支援（インターンシップなど）を通して進路が形成されていた。グループBの事例では，母親が病気を抱えていたために家庭からの支援は得られず，アルバイト中心の限られた社会関係の中で新たな進路形成が困難になっていた。

また，以上の3ケースからも示唆されるように，中退後の進路形成における家庭の影響は，経済資本だけでなく，文化資本や社会関係資本の影響もみられる。しかし，多くのケースで各資本の豊かさは大きく重なっており，経済的に困難を抱える事例ほど，社会的な支援に繋がりにくい状況が明らかになった。

4　高校中退に対する自己解釈

（1）当事者による中退解釈の背景

当事者による高校中退に対する自己解釈は，中退後のプロセスと現在の状況に基づいて意味付けられている。そのため，中退後の状況が不安定なケースでは高校中退は良くなかった出来事として否定的に語られる場合が多く，現在の状況が比較的安定しているケースでは中退して良かったという肯定的な経験として語られる傾向があった。

肯定的な自己解釈の背景としては，「（中退によって）学校内外の人間関係から離れることができて精神的に安心できた」（4番），「不登校中は将来のことを考えられなかった。遠回りしたが，トータルでよい方向に進めた」（32番）などのように否定的な学校経験との決別として中退を解釈していたり，「（中退後に）フリースクールに来て，友だちの大切さや，先生と生徒の関わり合いはこうあるべきなんだっていう今までの体験を覆すような経験がたくさんあった」（2番），「早く社会に出て働いて，学校より厳しい世界で一般常識を身につけることができた」（19番），「やめてなかったら好きな歌もできてなかった」（20番）など中退経験を積極的な物語へと転換する社会関係の変化や進路形成があった。

一方，否定的な自己解釈としては，「仕事が見つからないのは中卒という立場のせいなので高校ぐらい出ておけば良かった。そもそも中卒だというだけで全く仕事がないのは，それはないよと思う」（7番），「アルバイトで働いていても中卒だと厳しいと感じる。簡単な計算や漢字がわからなくて恥ずかしい思いをしている。最近になって，将来を不安に思うことが多くなった。」（18番），「高校くらい卒業していれば，今のような状況にはならなかったかもしれない。十数年間社会に出て暮らしてきたが手元に何も残っていないのがとてもつらい」（35番），「『学歴＝仕事ができない』ではないと思うが，就職の時は高卒以上というハードルに悩まされる。高校をやめてなかったら，今も仕事を続けていられたのかな」（38番）など，就労の困難や将来への不安によって高校中退の経験が人生における後悔の物語として位置付けられていた。

（2）中退経験に対する多面的な解釈

中退経験に対する自己解釈には現在の状況が影響しているが，前項で取り上げた個別ケース（10番，21番，31番）でも見られたように，多くのケースで肯定と否定の相対する意味付けが語られており，一義的な意味付けに回収することがけきない中退経験に対する自己認識の揺ら

ぎが存在していた。

こうした多面的な解釈は，中退後の進路が比較的安定しているグループAやグループCでも語られており，現在の状況にかかわらず中退経験の意味付けに揺らぎがみられる。多面的な解釈における肯定的な面としては，「中退あっての今の自分，やめてよかったと思っているのは変わらない」（13番），「中退したことで新たな出会いや経験が得られ，専門学校に進学できた」（27番）などと語られている。一方で，否定的な面として，「中退しなければ別の人生があったかもしれない，苦労するし他人にはしない方がいいと言う」（13番），「明確な理由もなく中退したのは考えが甘かった，これからの就職活動に向けて履歴書に中退と書くのは気が引ける」（27番）などと語られている。高校中退という決断が次の進路へのステップになったと肯定的に捉える反面，中退をしていなければ今よりも良い人生になっていたかもしれないという「失われた可能性」への思いが表れていた。

また，中退後に不安定な生活が継続しているグループBでは，多面的な解釈の否定的な面としては，「仕事が見つけにくいし，中退に対する世間の偏見を感じる」（17番），「中退したことをコンプレックスに感じている」（52番）などと中退後の生活や就労での困難を実感している一方で，肯定的な解釈として，「後悔していないし，今の生活に満足している」（17番）「色々な人と知り合いになることができなのでプラスに感じている」（52番）などと語られている。彼／彼女らにとって中退後の生活や就労での困難は自分自身にとっては身近で普通の世界であり，自然なものとして肯定的に受け入れているようであった。否定的な解釈は，強い後悔というよりは「中退しないほうが良い」という一般論として語られる傾向があった。

（3）小括

中退の意味付けは，現在の状況や中退後の経験という限定的な位置から解釈されている。否定的な解釈の背景には，現在の生活における様々な困難であったり，雇用や将来への不安，社会からの偏見に満ちたまなざし，楽しい高校生活への憧れの思いがあった。また，肯定的な解釈では，ネガティブな経験であった学校生活との決別，中退後の新たな進路の実現，家族や友人あるいは社会的な関係を再構築していく経験などが背景となっていた。

一方で，グループBで語られているように，現状の困難に対する受忍やあきらめの意識を背景とした積極的な経験を伴わない肯定的な解釈も存在する。アルバイトや友人間関係など狭い生活世界で生きる彼／彼女らにとって社会的な関係は限定的であって生活を好転させる支援には繋がりにくく，不安定な生活を「普通」に感じ，異なる進路展望を描くことが困難になっていると考えられる。

最後に，グルーピングによる分析のまとめとして，家庭の影響に着目をして主なグループの特徴を簡潔に整理する。グループAでは，恵まれた家庭の条件が基盤となって，身近なモデルとなる人との出会いを通して進学に繋がるなど，新たな進路に向けた展望が広がっていく過程がみられた。一方で，グループBでは，中退の背景に家庭環境の困難な状況が影響を与えており，さらに中退後の進路形成においても利用できる資源の少なさが影響して苦しい生活を抜け出せずにいた。しかし，グループCのように，経済的な困難があっても家族からの精神的な支えや具体的なアドバイスによって，社会的な繋がりを広げて新たな進路を切り拓いていく可能性を見出すことができた。また，グループEでは，家庭に経済的ゆとりがあっても何らかの要因によって有効な支援を受けられず，将来への展望が描けないまま，家庭の資源も活かすことがで

きずにいた。

以上のようにグルーピングによる分析によって，高校中退経験者の進路形成は家庭に大きく依存していることが明らかになった。こうした実態は，高校中退に関する社会的な支援が不足していることの表れであると考えられるが，家庭の経済・文化・社会関係資本の影響によって中退後の進路形成に向けた様々な支援へのアクセスが実現されており，家庭環境で困難を抱えている場合ほど社会的な支援に繋がりにくい状況が明らかになった。

おわりに

高校中退には様々なケースが存在しており，その背後にある問題の複合的な絡まりを前提とすることなく特定の問題だけでそれを捉えたり，また中退後の若者たちの自己意識をもっぱらネガティブなものと仮定したりすることは，高校中退経験者を不正確な像でもってカテゴリー化することにつながる。高校中退は，むしろその背後の問題をとらえるための“切り口”としての位置にある。絡まり合う問題を解きほぐし，当事者の意味解釈も含めて，高校中退がどのような“現象”であるのかを明らかにしていく必要がある。たとえば学校において中退に至る局面に焦点を当て，高校中退を生徒の側から子細に描くよりミクロな調査研究も重要であろう（古賀 2016）。しかし，そうした研究を尊重しつつも，中退をそうしたスコープに収まりきらない事象として把握することもまた欠かせないと考える。どのような経過を経て高校中退に至るのか，またその後の経過，人生を見ずには，それが何をもたらすものなのかを理解することはできない。これまで主として高校中退後まもない時期の調査が行われてきたが，本稿は高校中退を生い立ちから20代〜30代の時期にわたるプロセスとして捉えて，相当数のケースを収集，分析することを試みた。

本調査の分析から高校中退の捉え方について次の点が指摘できるであろう。

第 1 に，先行研究整理で触れた高校教育制度と貧困・社会的排除をめぐる問題である。本調査は無作為抽出ではないため，高校中退経験者の内訳比率は有意性をもたないが，本調査のケース分析では家庭の経済状態を始め，社会的に不利な生活条件のもとで中退に至るケースが相当数あった。先行研究整理で述べたように高校教育制度と生徒指導等の実践の問題を高校中退を生む主たる問題として捉える傾向があったが，青砥（2009）や酒井（2015）の指摘するように貧困・社会的排除の観点から高校中退を捉える必要をあらためて明確にしておきたい。

第 2 に，高校中退が家庭の経済的貧困など，不利な生活条件からただちにもたらされるわけではないという点である。そういった不利・不安定な背景をもっているところに，家庭での何らかの急変や高校の友人関係あるいは管理体制などに関わるトラブルが生じ，中退に至るといった経過が比較的多く見られた。また喧嘩や非行等の問題だけでなく，病気の生徒に対して高校側が自主退学を要求するケースや生徒が退学に至るよう問題行動を起こすことを待っているケースさえもあった。種々の課題を抱える生徒たちの対応を教師任せにしている教育条件整備，文教行政の貧困という問題はあるが，高校側の指導・支援のあり方に問うべき点がないわけではない。個々の生徒が有する生活条件と発達課題，高校の生徒指導等と教育行政による条件整備，社会的支援制度などのあり方が絡み合いながら，ある場合には中退に帰結するのであ

る。

第3に，貧困・社会的排除の観点を明確にしながらも，高校中退経験者がすべて同じプロセスをたどるわけではなく，その軌跡には分岐が存在していることもまた指摘しなければならない。家庭の経済状態や家族関係に困難があるわけではなく，進学校に通っていた生徒が中退するケースもある。こうした生徒の場合，多くは高校中退後，別の高校に転入したり，高認を受けて高卒資格を取得したりして，さらには大学や専門学校に進学していく。家計に厳しさを抱えている家庭の生徒の場合，中退後，高校にもどることや大学・専門学校等に進学することは難しく，正規雇用に就くことも難しい状況があった。高校中退経験者の中にも階層的分岐が存在し，それが進路の分岐として再生産されているといえる。

第4に，高校中退者の進路の分岐は階層に規定されているが，分岐は社会的な資源等にも規定される点である。家庭的背景が豊かでなくても，たとえば高校に再入学して卒業し，正規雇用に就職できているケースもあり，また逆に経済的に安定している家庭の子どもでも中退後の生活に苦労をしているケースも見られた。前者の場合，家族の励ましに加えて人との出会いが次の進路への媒介となっている場合がまま見られ，社会関係に恵まれていたといえる。後者の場合，次の進路に結びつくような出会いや支援してくれる家族が得られておらず，本人をとりまく社会関係によってむしろ進路や生活が困難に向かうケースもあった。無職者の中には，いくつかの困難にぶつかり，就労できない状況に至ったが，NPO等の支援団体につながり，生活保護の受給が可能となるなど，次の生活の条件を獲得できている者がいた。このように中退後の軌跡は，依拠できる社会的資源や社会関係の有無によって異なっている。

第5に，当事者の高校中退評価が一律に否定的なものとなっているわけではなく，不利な状況にある者でも進路探索において前向きな意識が多く見られた点である。中退経験をマイナスと捉える発言のほとんどは，雇用・進学という進路に関する不利・不本意と社会による無理解，蔑視であり，プラス解釈は，やめてよかった，高校にあのまま留まっていたら駄目になっていたというものが多い。高校中退に関する当事者の（再）解釈はプラスマイナス両面あり，それは中退後の進路と現在の生活の状況が一定影響している。もう一度高校に入り直して卒業したり，安定した就職先を確保したりできた者は，苦しい状況を抜け出るために高校中退は必要なことだったと述べている。中退後の生活が安定せず，負の経験としてしか中退経験を語らない者もいた。しかし，現状がけっして安定しておらず，困難を感じている者でも，次の道を探る糧として中退経験を有意味なものと捉え，自己存在を肯定しようとしていたケースが多かったということはできる。

今回のデータは過去との比較ができないため，その現代性を明確にすることは難しい。しかし，ポストフォーディズムのもとでの若年者雇用の急速な非正規化の進行と日本社会の高学歴化を見るなら，高校中退者の雇用と生きる空間は狭隘になっていると推測される。本田(2006)は1990年代以降，若年者の初期キャリアは正規雇用と非正規雇用の2つのルートに分別され，両者の間に移動障壁が存在するとし，また吉川（2009）は大卒と非大卒の間に大きな分断線があるという。1975年と2005年のSSM調査データを比較した近藤（2011）は出身位置と到達位置（親階層と子階層）という点から見ると，1975年と比べて2005年には上昇移動者と下降移動者の分化の拡大傾向が観察されており，その分化の1つとして若年層の下降移動があると指摘している。今回の調査では，中退後，高卒資格を取って大学へ進んでいける安定層と，高校に

もどりにくく，有効な職業資格や正規雇用への道も開かれにくい不安定層の存在が確認できた。こうした分岐が過去にもあったとしても，上のような近年の研究動向を参照するならば，その重みは異なっているといえよう。

当事者の多くが自己の経験を（再）解釈しながら次の道を見出そうとしており，適切な社会的資源と社会関係に出会うことができれば，中退後の軌跡は大きく変わりうることが確認された。本調査の結果は，社会保障制度や雇用制度，教育制度（高卒資格と職業資格の取得，あるいはそれに代替する教育訓練機会・制度の創設，それらを得ようとする期間の生活保障など）といった制度面の改革の必要性を示唆する。１つには言うまでも無く，困窮層への経済的支援である。先年，子どもの貧困対策法が制定されたが，これらが実際に必要とする人々に届くかどうか，それによってどのような効果があったか，検証が求められる。また中退後の雇用が安定したものとなるような雇用制度改革も重要である。

高校中退者は一度離れた高校にもどりにくい状況があり，また高校に代替する教育機関や職業訓練期間も少なく，いわば制度の狭間に落ち込むような位置に置かれてきた。戦後型移行システムが中学から高校へ，高校から就職・進学へと間断なく移行するものであったため，移行領域にはクッションになるような空間はない。前期中等教育と後期中等教育の接続部分に進路を再考したり，次の道を探索・準備したりする機会を作ることは一定の意義をもつ可能性がある[4]。

本調査の対象者の中には，中退後に専修学校高等課程を利用できたことが大きな支えになったというケースがあった。これには実際的な教育を受けることができたという面と異年齢の人々と会うことで精神的に支えられたという面の両面の役割を同課程が果たしたものと考えられる。多くの生徒が高校に入学する前に学びへの意欲を失い，勉強もしていない中で，主として教科学力を追求する高校教育は生徒の学びの実情との間に大きな溝があるかもしれない。後期中等教育段階の教育の豊富化を図る方策の検討が求められよう。

その際，重要なことは当事者が自己解釈を活かし，自らの進路や人生の展望を考えることのできるような場や機会を作り出すことである。支援政策はともすれば当事者を受動的存在としてみる傾向があるが，人は参加の場と機会を得ることによって，他者や社会との関係を組み替えながら，発達を遂げていく（Colley他 2007）。そのような若者の発達を可能とするような学びの場を高校制度の内外にいかに用意できるかが今後追究されるべき課題である。

注

1 本稿の分析サンプルに含まれなかったものも含め，本調査では合計67ケースのインタビューを行ったが，その記録整理と分析に相当の時間を要したことに加えて，執筆者の職場での職務の変化やサバティカル研修による長期海外滞在などがあったために本稿の掲載が当初予定を大きく遅れることとなったこと，また本稿の記述には先に刊行した中間報告と重なる部分があることをお断りしておく。

2 調査対象は2004年度中に高校を中途退学した者1595人であったが，回答者は168人に留まった。

3 本稿は，「はじめに」からⅢまでと「おわりに」は横井，Ⅳは伊藤が執筆した。ケースの記録整理と表１の作成作業，Ⅲ執筆のためのデータ整理は横関が加わって行った。

4 デンマークの生産学校は後期中等段階の教育機関からドロップアウトした生徒を受け入れる機関である（大

串 2007，豊泉 2008)。日本とデンマークでは教育制度のあり方に大きな差があるため，こうしたものを日本に 導入することは難しいかもしれないが，中退者を支援する公的な教育の場が用意されている点は参考になる。

参考文献

青砥恭（2009)『ドキュメント高校中退――いま，貧困がうまれる場所』筑摩書房

浅井春夫他（2008)『子どもの貧困』明石書店

阿部彩（2007)「日本における社会的排除の実態とその要因」『季刊・社会保障研究』Vol.43No.1

Bhalla, A.S. and Lapeyre, F.,（2004）*Poverty and exclusion in a global world, 2nd edition*, Macmillan Publishers Limited（アジット・S・バラ，フレデリック・ラペール（2005)『グローバル化と社会的排除 ――貧困と社会問題への新しいアプローチ』昭和堂）

Blasco, A. L., McNeish, A. and Walther, A.(eds.)（2003）*Young people and constructions of inclusion: towards integrated transition policies in Europe*. Bristol: The policy press.

Bourdieu, P.(1979), *La Distinction: Critique sociale du jugement*, Paris: Edition de Minuit.(ブルデュー，P.（1989)『ディスタンクシオン〔社会的判断力批判〕Ⅰ』新評論）

Colley, H., Boetzelen, P., Hoskins, B. and Parveva, T.(eds.)（2007）*Social inclusion and young people: breaking down the barriers*. Strasbourg: Council of Europe Publishing.

Giddens, A.（1991）*Modernity and Self-Identity*, Cambridge: Polity Press.（ギデンズ，A（2005)『モダニティと自己アイデンティティ――後期近代における自己と社会』ハーベスト社）

北大高校中退調査チーム（2011)「高校中退の軌跡と構造（中間報告）――北海道都市部における32ケースの分析」『公教育システム研究』10

本田由紀（2005)『若者と仕事―「学校経由の就職」を超えて』東京大学出版会

本田由紀（2006)「若年層の雇用の現状と課題――「ダブル・トラック」化にどう取り組むか」樋口 美雄・財務省財務総合政策研究所・財務総合政策研究所編『転換期の雇用・能力開発支援の経済政策――非正規雇用からプロフェッショナルまで』日本評論社

本田由紀編（2007)『若者の労働と生活世界――彼らはどんな現実を生きているか』大月書店

乾彰夫（2002)「『戦後型青年期』とその解体・再編――『学校から仕事へ』の移行過程を中心に」『ポリティーク』3号

乾彰夫編（2006a)『不安定を生きる若者たち――日英比較:フリーター・ニート・失業』大月書店

乾彰夫（2006b)「フリーター・若年失業・ニートの実相」(2006）乾編著『不安定を生きる若者たち――日英比較 フリーター・ニート・失業』大月書店

乾彰夫編（2006c)（東京都立大学「高卒者の進路動向に関する調査」グループ著)『18歳の今を生きぬく――高卒1年目の選択』青木書店

乾彰夫（2010)『〈学校から仕事へ〉の変容と若者たち――個人化・アイデンティティ・コミュニティ』青木書店

乾彰夫編（2013)『高卒5年 どう生き，これからどう生きるのか――若者たちが今〈大人になる〉とは』大月書店

乾彰夫・本田由紀・中村高康編『(2017) 危機のなかの若者たち――教育とキャリアに関する5年間の追跡調査』東京大学出版会）

乾彰夫・桑島晋平・原未来・船山万里子・三浦芳恵・宮島基・山﨑恵里菜（2012）「高校中退者の中退をめぐる経緯とその後の意識に関する検討――内閣府調査（2010）の再分析」『教育科学研究』26

岩田香奈江（2008）「不登校問題に対する政策的対応の現状と課題――東京都の不登校発生率地域差に対する社会構造的要因に注目して」『人文学報』392号

吉川徹（2009）『学歴分断社会』筑摩書房

小林剛（1987）『高校中退――克服のカルテ』有斐閣

小林剛（1996）『子ども支援の臨床教育学――いじめ・不登校・中退問題への追跡』萌文社

小林雅之（2008）『進学格差――深刻化する教育費負担』筑摩書房

古賀正義（2004）「学校化社会なかの『中退問題』――教育困難校の事例から」古賀正義編著『学校のエスのグラフィー――事例研究から見た高校教育の内側』嵯峨野書院

古賀正義（2016）「高校中退問題と格差社会」佐藤学他編『岩波講座教育 2　変革への展望』岩波書店

近藤博之（2011）「社会空間アプローチによる階層の分析」石田浩他編『現代の階層社会 2・階層と移動の構造』東大出版会

工藤宏司（2008）「ゆれうごく『ひきこもり』――『問題化』の過程」荻野達史他編著『「ひきこもり」への社会学的アプローチ――メディア・当事者・支援活動』ミネルヴァ書房

宮本みち子（2004）『ポスト青年期と親子戦略――大人になる意味と形の変容』勁草書房

文部科学省（2017）「平成28年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」

内閣府政策統括官（共生社会政策担当）（2009）「高校生活及び中学校生活に関するアンケート調査（高等学校中途退学者及び中学校不登校生徒の緊急調査）報告書」

内閣府（2011）「若者の意識に関する調査（高等学校中途退学者の意識に関する調査）報告書」（資料版・解説版）

中西新太郎・高山智樹編（2009）『ノンエリート青年の社会空間――働くこと，生きること，「大人になる」ということ』大月書店

大串隆吉（2007）「ドイツ，デンマーク生産学校のデッサン――学校中退者・失業青年に職業訓練を」『人文学報. 教育学』42

Roberts, K., Clark, S. C., and Wallace, C. (1994) Flexibility and Individualisation: A Comparison of Transitions into Employment in England and Germany, *Sociology*, Vol.28, No.1.

酒井朗（2015）「教育における排除と包摂」『教育社会学研究』96

酒井朗・林明子（2012）「後期近代における高校中退問題の実相と課題――『学校に行かない子ども』問題としての分析」『大妻女子大学家政系研究紀要』48

清田夏代・黒崎勲（2001）「高校中退問題の動態と変容――明るい中退論批判」『教育学年報 8 子ども問題』世織書房

豊泉周治（2008）「社会的包摂，フレックシキュリティ，デンマーク生産学校――日本・デンマーク比較研究(2)」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』57

The Loci and Structures of Dropout from High Schools : Analysis of 64 Cases in Hokkaido Prefecture

Toshiro YOKOI, Kenji ITO and Rie YOKOZEKI

Key Words

High School Dropouts, Process of Youth Transition, Early School Leaving, Parties Interpretation of Dropout, Social Exclusion

Abstract

We conducted interview surveys to inquire the processes of youth transition in contemporary Japan. The young interviewees were the residents in Hokkaido Prefecture, from 17 to 35 years old, who had dropped out from high schools. The number of cases are 64. It is necessary to see the processes of their education, jobs and lives from dropping out and after it to understand the phenomenon of dropping out from high schools. Dropping out is one of the results of poverty and social exclusion in many cases. However some dropouts from middle class families entered professional schools or universities, and others went through a lot of difficulties in their daily lives. We have found the stratification in dropouts. And some dropouts from middle class families didn't have stable jobs, but some dropouts from lower class families got regular employment because they encountered social resources and relationships. Many dropouts interpreted dropping out from school as the meaningful experiences for their lives. The loci of lives of high school dropouts could be changed, if they got relevant social resources and relationships.